上幌内1遺跡（2）

-厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 18-

2018.3

厚真町教育委員会

序　文

厚真町は、胆振・日高管内屈指の豊かな水田地帯を有する大いなる田園都市であります。この穀倉地帯を潤す厚真川は夕張山地の南端を源とする、農作物に恩恵を授ける大切な河川でもあります。この豊かな厚真川と“ふるさと厚真”を更なる発展へと進めるために、農業用水確保と治水対策を主な柱とした多目的ダム「厚幌ダム」が、平成７年度に本格着工され、平成３０年秋に共用開始となります。

さて、本書はこの厚幌ダム建設に先駆けて沈み行く地域に残された埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査された上幌内１遺跡の調査報告書であります。本書は平成 26 年度の調査に引き続いて、電柱移設に伴う発掘成果を記載するもので、獣骨集中や杭列跡などが見つかっています。先住民族であるアイヌ民族の歴史を探るうえでも貴重な資料とも思われます。

今後は、これらの埋蔵文化財を地域の教育的資源、知的観光財産として町内外へ広く普及活用を推し進めてまいる所存でございます。また本書が広く埋蔵文化財の保護並びに調査・研究の一助となれば幸いに存じます。

最後となりましたが、調査・整理・報告にあたり御指導、御支援を賜りました関係諸氏ならびに関係機関に、真に厚く感謝申し上げる次第であります。

平成３０年３月

厚真町教育委員会
教育長　遠藤　秀明

例　言

1. 本書は、平成 28 年度に行った厚幌ダム建設事業に伴い発掘調査された上幌内１遺跡（登載番号：J-13-30）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、北海道胆振総合振興局の委託を受け、厚真町教育委員会が実施した。
3. 調査･整理（分担）は以下の体制で行った。

調査担当者：乾 哲也･奈良智法･宮塚義人（有限会社 宮塚文化財研究所）

調査員･調査補助員：宮崎美奈子･山戸大知

事務員：浅野愛子･脇田幹王

測量技能作業員･整備技能作業員･写図工･発掘作業員･整理作業員はショロマ１遺跡（２）報告書に準ずる。

乾　：統括･監修

奈良：土器復元･実測図作成･拓影指導･写真整理

宮塚：現地調査指導･Ⅲ層･Ⅴ層遺構図面作成指導･写真図版作成

4. 本書の編集は乾、奈良の協力を得て宮塚が行い、各節の執筆は文末に記す。
5. 出土遺物の写真撮影を有限会社写真事務所クリーク 佐藤雅彦へ委託した。
6. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会で保管している。
7. 調査･報告にあたって下記の機関および個人より御指導･御協力を頂き、記して感謝申し上げます。

北海道教育庁生涯学習推進局文化財･博物館課、北海道胆振総合振興局、
北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部厚幌ダム建設事務所、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター、
札幌学院大学人文学部、千歳市埋蔵文化財センター、公益社団法人北海道アイヌ協会、厚真アイヌ協会、
苫小牧アイヌ協会、苫小牧市美術博物館、苫小牧駒澤大学、平取町沙流川歴史館、
平取町立二風谷アイヌ文化博物館、恵庭市教育委員会、新ひだか町教育委員会、厚真町幌内自治会、
青野友哉、赤井文人、赤石慎三、阿部明義、天方博章、右代啓視、臼杵 勲、内田和典、大沼忠春、
長田佳宏、小野哲也、加藤 忠、工藤研治、越田賢一郎、佐藤一夫、澤田一憲、鈴木琢也、鈴木 信、
瀬川拓郎、田口 尚、田才雅彦、鶴丸俊明、中田裕香、長町章弘、西脇対名夫、福井淳一、藤原秀樹、
三浦正人、蓑島栄紀、宗像公司、村本周三、森岡健治

凡 例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号を用いた。なお、層位にこれらの略号を付加している。

〔遺構〕　Ｔピット：TP　柱穴：KP

〔遺物〕　土器：P　ﾌﾚｲｸ･ﾁｯﾌﾟ：FC　礫：S

〔遺物等集中〕　土器集中：PB　獣骨集中：BB

2. 地層等について下記の略号を用いた。

〔堆積土〕樽前 a 砂質降下火山灰：Ta-a　駒ヶ岳 c_2 砂質降下火山灰：Ko-c_2　樽前 b 降下軽石：Ta-b
有珠 b 降下火山灰：Us-b　白頭山苫小牧火山灰：B-Tm　樽前 c 砂質降下軽石：Ta-c
樽前 d_1 細礫質降下スコリア：Ta-d_1　樽前 d_2 中礫質降下軽石：Ta-d_2　恵庭 a 降下軽石：En-a
黄褐色粘土質シルト（いわゆるローム）：L　撹乱：KR

〔色調〕　小山・竹原編著（1994）『新版 標準土色帳』に従った。

〔注記〕　土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については（　）内に粒径（単位：mm）、状態を記載した。

混入土の比率

A＋B：A と B が同量比混じる　　A－B：A を主体に B が多量に混じる

A＝B：A を主体に B が少量　　A≡B：A を主体に B が微量

φ：粒径（単位：mm）　　↓：以下　　（状態）：斑状に混じる・均一に混じる

〔層位〕　標準堆積層はローマ数字を用い、遺構覆土や倒木痕による撹乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。また、一覧表中には下記の略号を用いている。

U：上位　　M：中位　　L：下位

〔Ｔピット〕第Ⅲ章 第１節のＴピット堆積図には以下のトーンを用いた。

基本層の細分

：Ⅴ層　　：Ⅵ層　　：Ⅷa 層　　：Ⅷb 層　　：Ⅸ層

3. 挿図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。

遺構関連図：1/500　Ｔピット：1/40　杭列跡・杭跡：1/20・1/50　遺物集中：1/20・1/50

土器実測図：1/3　土器拓影図：1/3

4. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

〔線種〕　----------：オーバーハング　　－・－・－・－：推定線

5. 土器・土器拓影の挿図および写真図版の番号に後続する枝番号は同一個体表記である。

本文目次

序　文
例　言
凡　例

第Ⅰ章　調査の概要
第1節　調査要項と体制 …… 1
1. 調査要項 …… 1
2. 調査体制 …… 1
第2節　調査に至る経緯 …… 2
1. 厚幌ダム建設事業 …… 2
2. 発掘調査までの経緯 …… 2
第3節　調査の方法 …… 3
1. 発掘区の設定 …… 3
2. グリッド設定 …… 4
3. 包含層及び遺構調査の方法 …… 4
4. 整理作業 …… 7
第4節　遺物の分類 …… 7
1. 土器 …… 7
第5節　調査結果の概要 …… 8
1. Ⅲ層の調査 …… 8
2. Ⅴ層の調査 …… 8
第6節　遺跡の位置 …… 8
1. 厚真町の概要 …… 8
2. 遺跡の位置と周辺の環境 …… 14
3. 調査区内の地形と地質 …… 16

第Ⅱ章　Ⅲ層の調査
第1節　住居跡付属遺構 …… 22
1. 獣骨集中 …… 22
2. 杭列跡・杭跡 …… 24
第2節　土器集中 …… 28
第3節　包含層出土遺物 …… 30

第Ⅲ章　Ⅴ層の調査
第1節　Tピット …… 32

引用・参考文献 …… 34

写真図版
図　版 …… 35
報告書抄録 …… 43
奥　付

挿図目次

第Ⅰ章
図Ⅰ-1　厚幌ダム建設事業関連埋蔵文化財包蔵地位置図 …… 5
図Ⅰ-2　調査範囲・基準杭・試掘坑・位置図 …… 6
図Ⅰ-3　グリッド区分図 …… 7
図Ⅰ-4　厚真町内遺跡分布図 …… 10
図Ⅰ-5　周辺の遺跡と地形面区分図 …… 18
図Ⅰ-6　基本土層柱状図 …… 19

第Ⅱ章
図Ⅱ-1　Ⅲ層遺構配置図 …… 20
図Ⅱ-2　ⅢBB平面図 …… 23
図Ⅱ-3　杭列跡04・杭跡平面及び断面図 …… 27
図Ⅱ-4　ⅢPB-05・06平面及び垂直分布図 …… 29
図Ⅱ-5　遺構・包含層出土土器 …… 30

第Ⅲ章
図Ⅲ-1　Ⅴ層遺構配置図 …… 32
図Ⅲ-2　TP-48平面及び断面図 …… 33

挿表目次

第Ⅰ章
表Ⅰ-1　グリッド設定関係杭座標一覧表 …… 7
表Ⅰ-2　上幌内1遺跡検出遺構一覧表 …… 8

表Ⅰ-3　上幌内1遺跡出土遺物一覧表 …… 8
表Ⅰ-4　厚真町内埋蔵文化財
包蔵地一覧表(1) …… 11
表Ⅰ-5　厚真町内埋蔵文化財
包蔵地一覧表(2) …… 12

第Ⅱ章

表Ⅱ-1　Ⅲ層遺構群一覧表 …… 21
表Ⅱ-2　ⅢBB-01ハンドピック法
動物遺存体同定一覧表 …… 26
表Ⅱ-3　Ⅲ層遺構・包含層出土土器属性表 …… 31

第Ⅲ章

表Ⅲ-1　縄文時代遺構属性表 …… 33

写真図版目次

図版 1-1　A区Ⅲ層検出 …… 37
図版 1-2　C区Ⅲ層検出 …… 37
図版 1-3　ⅢBB-01検出 …… 37
図版 1-4　ⅢBB-01D検出 …… 37
図版 1-5　ⅢBB-01E検出 …… 37
図版 1-6　ⅢBB-01F検出 …… 37
図版 1-7　ⅢBB-01G検出 …… 37
図版 1-8　ⅢBB-01H検出 …… 37
図版 2-1　ⅢBB-01I検出 …… 38
図版 2-2　ⅢBB-01J検出 …… 38
図版 2-3　杭列跡04検出 …… 38
図版 2-4　ⅢKP-462・463完掘 …… 38
図版 2-5　ⅢKP-462・463断面 …… 38
図版 2-6　ⅢKP-465・464完掘 …… 38
図版 2-7　ⅢKP-465・464断面 …… 38
図版 2-8　ⅢKP-466完掘 …… 38
図版 2-9　ⅢKP-466断面 …… 38
図版 3-1　ⅢKP-469完掘 …… 39
図版 3-2　ⅢKP-469断面 …… 39
図版 3-3　ⅢKP-470・471完掘 …… 39
図版 3-4　ⅢKP-470・471断面 …… 39
図版 3-5　ⅢKP-473・472完掘 …… 39
図版 3-6　ⅢKP-473・472断面 …… 39
図版 3-7　ⅢKP-474完掘 …… 39
図版 3-8　ⅢKP-474断面 …… 39
図版 3-9　ⅢKP-476完掘 …… 39
図版 3-10　ⅢKP-476断面 …… 39
図版 3-11　ⅢKP-478・477完掘 …… 39
図版 4-1　ⅢKP-478・477断面 …… 40
図版 4-2　ⅢKP-480完掘 …… 40
図版 4-3　ⅢKP-480断面 …… 40
図版 4-4　ⅢKP-456完掘 …… 40
図版 4-5　ⅢKP-456断面 …… 40
図版 4-6　ⅢKP-458完掘 …… 40
図版 4-7　ⅢKP-458断面 …… 40
図版 4-8　ⅢKP-481完掘 …… 40
図版 4-9　ⅢKP-481断面 …… 40
図版 4-10　ⅢKP-482完掘 …… 40
図版 4-11　ⅢKP-482断面 …… 40
図版 4-12　ⅢKP-483完掘 …… 40
図版 4-13　ⅢKP-483断面 …… 40
図版 4-14　ⅢPB-05・06出土状態 …… 40
図版 5-1　ⅢPB-05出土状態 …… 41
図版 5-2　ⅢPB-06出土状態 …… 41
図版 5-3　B区Ⅴ層検出 …… 41
図版 5-4　TP-48検出 …… 41
図版 5-5　TP-48完掘 …… 41
図版 5-6　TP-48断面 …… 41
図版 5-7　C区Ⅲ層調査状況 …… 41
図版 5-8　ⅢBB-01調査状況 …… 41
図版 6　遺構・包含層出土土器 …… 42

第Ⅰ章 調査の概要

第 1 節　調査要項と体制

1. 調査要項

事 業 名：厚幌ダム建設事業　埋蔵文化財発掘調査　その 2
委 託 者：北海道胆振総合振興局
受 託 者：厚真町教育委員会
遺 跡 名：上幌内 1 遺跡（Ｊ－13－30）
調査面積：138 ㎡
所 在 地：北海道勇払郡厚真町字幌内 372-1～3 番地
受託期間：平成 28 年 4 月 7 日～平成 29 年 3 月 24 日
発掘期間：平成 28 年 7 月 19 日～平成 28 年 10 月 31 日
整理期間：平成 28 年 11 月 1 日～平成 30 年 3 月 16 日

2. 調査体制

厚真町教育委員会　教育長　兵頭利彦（平成 28 年 12 月 2 日迄）
厚真町教育委員会　教育長　遠藤秀明（平成 28 年 12 月 7 日～）
生涯学習課社会教育グループ
平成 28 年度
参事　橋本欣哉　主幹　宮下 桂　主査　乾 哲也（学芸員）　主査　奈良智法（学芸員）
委託担当者　宮塚義人（有限会社 宮塚文化財研究所）
平成 29 年度
参事　伊藤文彦　主幹　宮下 桂　主査　乾 哲也（学芸員）　主査　奈良智法（学芸員）
委託担当者　宮塚義人（有限会社 宮塚文化財研究所）
嘱託職員
調査員　宮崎美奈子（H28）
調査補助員　宮崎美奈子（H29）山戸大知（H28）
事務員　浅野愛子　脇田幹王（H28）
臨時職員　測量技能作業員　海津孝之　石山 容
　　整備技能作業員　畑島雄樹
　　発掘作業員　50 名（平成 28 年度ショロマ 1 遺跡発掘事業に含まれる員数）
　　整理作業員　20 名（平成 28 年度）　3 名（平成 29 年度）

（宮塚）

第 2 節　調査に至る経緯

1. 厚幌ダム建設事業

町内を縦貫する厚真川中・下流域には約 3,000ha もの水田地帯が広がっている。このため、春の灌漑用水の確保は勿論のこと、融雪や豪雨による洪水への治水対策が開拓期以来の課題とされていた。

昭和 46（1971）年には現河口より約 38km 地点に農業用ダムである「厚真ダム」が完成した。しかし、このダムは洪水調整機能が不十分で、昭和 45 年には洪水と渇水、昭和 48・50・56 年にも洪水が発生した。近年においては平成 12 年春の融雪期と平成 13 年秋に家屋や農地に被害を及ぼす洪水、平成 18・21・23 年にも一部が冠水する事態が発生している。また昭和 59・60・63 年には深刻な水不足にも見舞われており、平成 19 年は幼穂形成期の水不足により深水灌漑が行えなかったため低温障害を受け、作況指数が極端に低い年となった。平成 26 年春にも渇水のため、水田への引水ができず作付を断念する農家もあり、厚真町の基幹産業である農業、豊かな穀倉地帯を築くうえで、治水や農業灌漑などを目的とする新たなダム建設は町民の切望として陳情されてきた。さらには市街地への人口集中の進行による住宅街や苫小牧東港入港船舶への水道用水の需要が急増し、取水可能量は限界に達していることから、新たな上水道水源確保が急務となっている。

これらの状況の抜本的な改善策として、昭和 52 年に北海道室蘭土木現業所（現北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部。以下、室建管）により厚幌ダム建設事業の予備調査が着手され、昭和 61 年に実施設計である「厚真川総合開発事業計画調査」の着手が決まった。平成 7（1995）年に北海道と厚真町との間で「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」が締結され、洪水調整、灌漑用水、水道水の確保、流水の正常な機能維持の多目的ダムとして「厚幌ダム」の建設着工が決定された。また同年には地元厚真町内に厚幌ダム建設事務所（以下、ダム事務所）が開設され、その後、環境アセスメント等も実施されている。近年ではダム事業に関連して、道道切替工事や町内各地区の農業経営体育成基盤整備事業、農業用水路再編対策事業（厚幌導水路建設）が展開され、営農の効率化が促進されている。厚幌ダムの本格着工のひとつとして、平成 14 年度から湛水区域内用地買収とともに、一般道道上幌内早来停車場線の切替工事に着手し、北進平取線としてむかわ町穂別まで開通の計画がある。また平成 24 年度からは付随する町道や林道の切替工事も着手されている。

厚幌ダム本体は河口から 31.4km の地点に堤体が完成しており、規模は堤体長 516m、高さ 47.2m のダムである。貯水は常時湛水面標高 85.4m、最深湛水面標高 88.1m であり、総貯水量は 47,400 千㎥、厚真ダムのおおよそ 4.7 倍の貯水量となり、多方面にわたって絶大な効果波及がある。平成 29 年 10 月にダム試験湛水が開始され現在に至っている。

2. 発掘調査までの経緯

厚幌ダム建設事業の本格化を踏まえて平成 12 年 7 月 6 日にダム事務所より、ダム事業全体に係わる埋蔵文化財事前協議書（室土厚幌第 158 号）が厚真町教育委員会（以下、町教委）を経て北海道教育委員会（以下、道教委）へ提出された。事前協議区域は最深湛水面標高 88.1m 以下の区域と道道切替路線や湛水区域外の残土置き場など合計約 315,700 ㎡に及ぶ。厚幌ダム関連の埋蔵文化財発掘調査について道教委と町教委で協議した結果、試掘調査までは道教委が

行い、発掘調査は町教委と室建管で委託契約を締結し、町教委が実施することとなった。調査は平成14年度の厚幌1遺跡から始まり、平成28年10月で終了し、同年11月から平成30年3月まで整理業務及び報告書刊行を行い全ての事業が完了している。

湛水地域内については、平成13年10月に所在確認調査が行われ、周知の遺跡（オニキシベ1遺跡、上幌内1遺跡）を含め16ヵ所、面積235,500㎡の要試掘調査の回答がされた（平成13年11月16日付け教文第4532号）。以後、追加箇所や範囲拡張もあるが平成19年度までに8回、18地点の試掘調査が実施され、14遺跡、約143,000㎡の要発掘・要遺構確認調査地点が確認されていた。しかし、これまでの発掘調査成果から河岸段丘の低位面にも埋蔵文化財包蔵地が広がること等、この地区における遺跡の立地パターンが判明してきており、建設工事中の不時発見を避けるため、新たな視点での再試掘調査の必要性が町教委やダム事務所等から望まれていた。これを受け道教委は平成21年5月に湛水地域内の所在確認踏査を行い、要試掘調査地点10ヵ所を回答した（平成21年6月11日付け教文ス第928号）。このうち8地点については7･8月に試掘踏査を実施し6ヵ所の包蔵地が発見された（平成21年9月10日付け教文ス第1940号）。更に平成21年12月にも試掘調査が実施され新たに1ヵ所が追加された（平成22年1月5日付け教文ス第3145号）。平成29年1月現在で全ての発掘調査が終了し、総調査面積は要発掘面積、要遺構確認調査合わせて203,401㎡となる（図Ⅰ-1）。

上幌内1遺跡の埋蔵文化財包蔵地調査カードには、昭和47年12月に厚真町郷土研究会の踏査によって確認されたのが初出である。農家住宅及び耕作地であったことから表面採集によって遺物が回収され、包蔵地として周知されていたものと思われる。昭和54年9月に北海道教育委員会によって厚真町内における一般分布調査が実施され、「幌内3遺跡（J-13-30）」として登載された。

平成13年10月に道教委による厚幌ダム建設事業に係るA調査で協議地№5として13,200㎡の「要試掘調査」と回答された（平成13年11月16日付け教文第4532号）。試掘調査は平成15年9月に実施され、南部の開析谷周辺を主体として段丘面の縁辺部に30ヵ所の試掘孔が掘開され、2ヵ所からたたき石、被熱礫の計9点が出土したほか、3ヵ所から土坑などの遺構も確認された。遺物等が確認された試掘孔は段丘面のほぼ全域に散在していることから、南北約220m、東西20～55mの範囲の約8,758㎡について「要遺構確認調査（部分的に発掘調査となる範囲がある）」の回答がされた（平成15年11月14日付け教文第4692号）。

なお、本遺跡は平成15年11月に町教委によって「幌内3遺跡」から「上幌内1遺跡」に名称変更されている。（乾）

第3節　調査の方法

1. 発掘区の設定

上幌内1遺跡の発掘調査範囲は、ダム水没地域内であることから遺跡の全面が調査対象となっており、微地形等で若干の変更が生じるものの、道教委の試掘調査回答の「要発掘調査範囲」の8,758㎡に基づいている。平成28年度の調査範囲は、電柱・控え柱が設置されている部分（平成26年度の調査で除外した部分）である。平成27年まで厚真川の上流区域への電力が供給されており、上幌内1遺跡の調査区内には3ヵ所の電柱があった。このためクリアランスを取っ

て発掘調査範囲から除外した。平成 28 年春に電力線の切り替え工事が終了したため、この 3 ヵ所（北側から A･B･C 区と付番した）を平成 28 年度に発掘調査した。本調査報告書はこの調査結果である。

2. グリッド設定

平成 28 年度は、平成 26 年度に設定したグリッド網の現地打設杭から復元設定し、平面の公共座標と標高値、グリッド名称はこれを踏襲した。なお、報告書の遺構図中に位置関係を示すため、5m グリッドを 4 分割した中グリッドや、1m 四方に 25 分割した小グリッドも同様に定義した。

3. 包含層及び遺構調査の方法

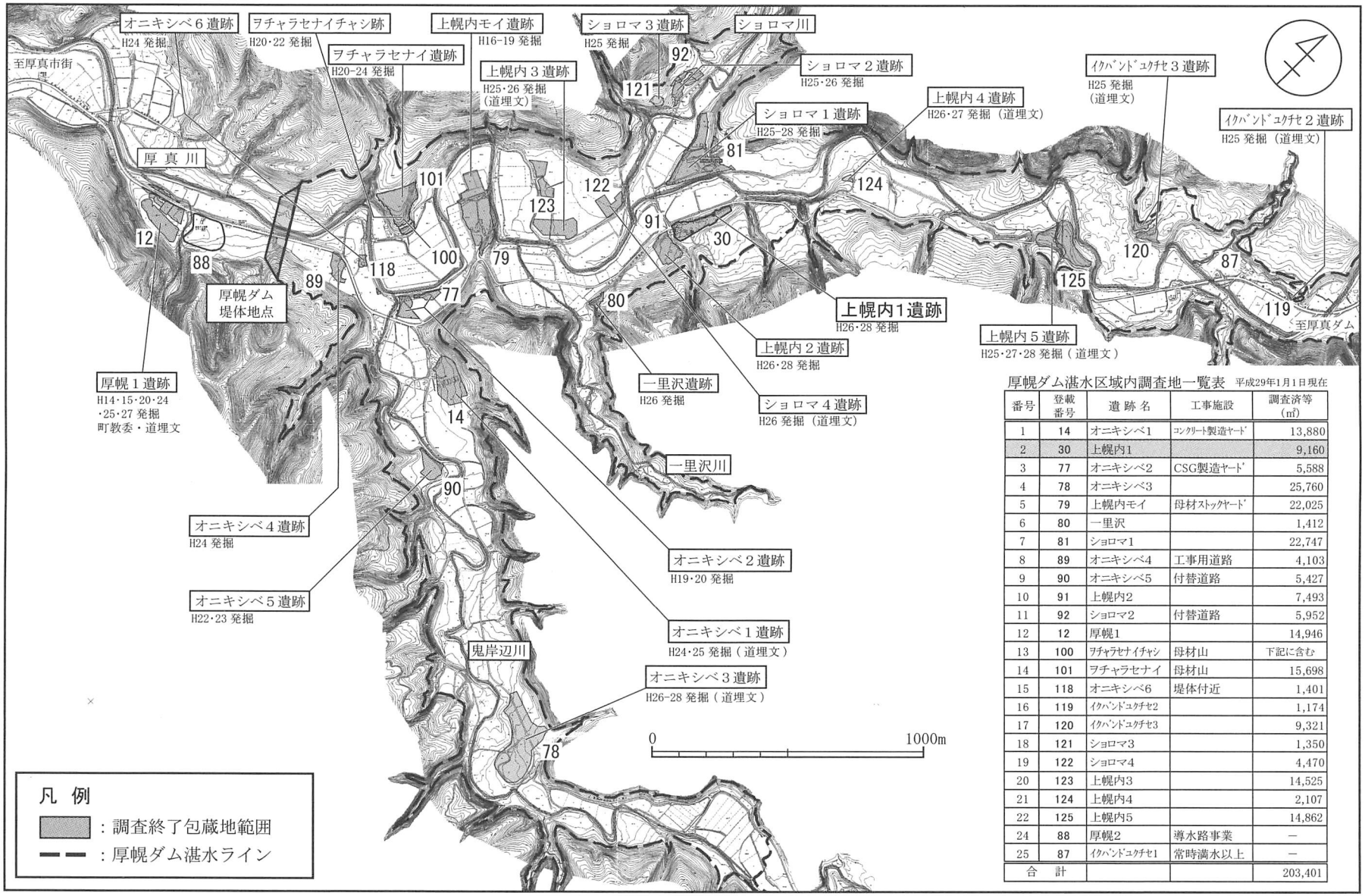
平成 28 年 7 月下旬から調査員と作業員の立会、作業補助のもとバックホーで表土、耕作土、火山灰を除去し、遺物包含層のⅢ層の残存範囲を確認、記録した。なお、切株などについては抜根等を行わず周囲の土砂を除去した。遺構･遺物に障害のある場合には、人力で除去した。

発掘作業はⅢ層上面などの調査着手面の検出作業と撹乱穴の清掃作業をスコップやジョレンで行った。同時にグリッド杭打設を測量技能作業員が中心となって行った。なおこの時点で調査区内の地形図作成のため 50cm ピッチで Z 座標単点を記録し、平成 26 年度調査部分と整合性をとっている。

Ⅲ層からは A･C 区で遺構･遺物が検出された。Ⅲb 層まで 1～3cm の深度を移植ゴテで掘削し、遺物の検出に努めた。暗褐色を呈するⅢc 層は遺物が殆ど出土しないことからジョレンで掘開し、柱穴等の確認作業を行った。一部はⅣ層の樽前 c テフラ上面で行っている。遺構調査は、包含層掘開中に土器片や礫、土壌化した灰層、焼骨片などを一定の範囲で集中的に検出確認した際に、土壌堆積状態観察のためのベルトを設定してから、範囲確定の精査を行った。特に樽前 b テフラ直下から検出遺構上面までのⅢ層の被覆土層の層厚に留意し、層位からの時期の推定に努めた。Ⅲ層におけるこの調査手法は平成 16 年度から確立したもので、以降、遺構間の新旧関係、帰属年代の推定に重要な情報根拠となっている。杭穴はⅢc～Ⅳ層（樽前 c テフラ）上面を確認面とし、包含層の主体であるⅢb 層調査終了後にこれらの遺構検出作業を行った。

Ⅲ層調査終了後、人力によって Ta-c（Ⅳ層）の除去を行い、Ⅴ層上面の地形測量を同様に行っている。Ⅴ層からは B 区でＴピット 1 基が検出され、底面及び壁面の立ち上がりや掘り上げ土の範囲及び堆積状態の確認作業を行った。図化記録は、Ⅲ層、Ⅴ層ともに、完掘後にトータルステーションを用いて平面形及びエレベーションを記録し、堆積状態については半截状態で調査員が分層と土層注記を行い、測量技能作業員が堆積状態の実測を行った。遺物出土状態等微細図については、同様に記録した輪郭図を下地に測量技能作業員が作成した。各調査経過の写真記録は調査員が 35mm 一眼レフデジタルカメラで撮影した。出土遺物は、全点に遺物番号を付与した。取り上げについては調査員による層位確認のうえ、トータルステーションによる 3 次元座標のデータ取得と同時に、手簿（日付･グリッド･層位･遺物名等）の記載も行い、データ入力ミスの補完をした。礫及びフレイク･チップに関してはトータルステーションによる位置記録を行わず､層位を記録しながら 5m 四方グリッドの 4 分割中グリッドで取り上げている。

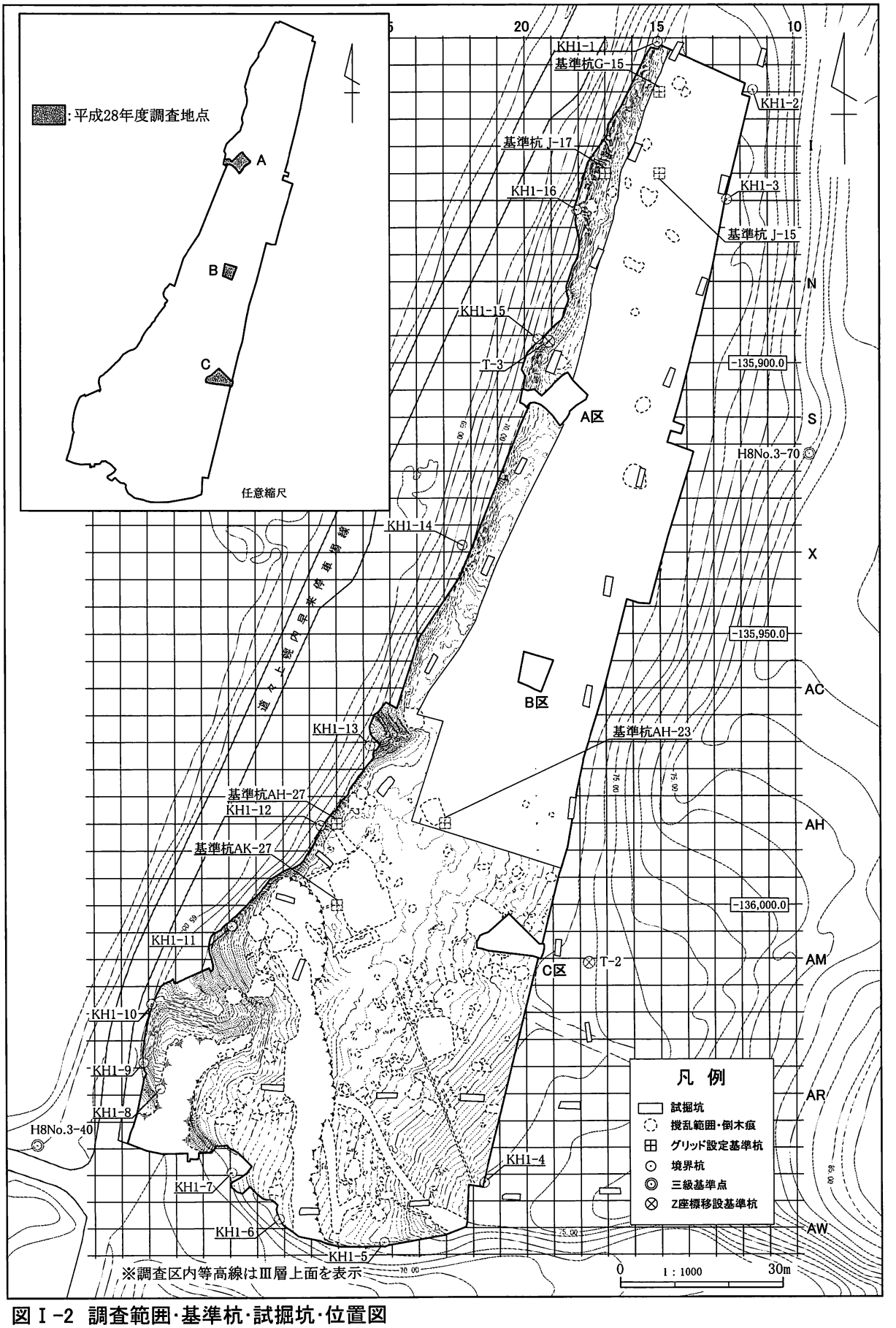
（乾）



厚幌ダム湛水区域内調査地一覧表　平成29年1月1日現在

番号	登載番号	遺跡名	工事施設	調査済等（㎡）
1	14	オニキシベ1	ｺﾝｸﾘｰﾄ製造ﾔｰﾄﾞ	13,880
2	30	上幌内1		9,160
3	77	オニキシベ2	CSG製造ﾔｰﾄﾞ	5,588
4	78	オニキシベ3		25,760
5	79	上幌内モイ	母材ｽﾄｯｸﾔｰﾄﾞ	22,025
6	80	一里沢		1,412
7	81	ショロマ1		22,747
8	89	オニキシベ4	工事用道路	4,103
9	90	オニキシベ5	付替道路	5,427
10	91	上幌内2		7,493
11	92	ショロマ2	付替道路	5,952
12	12	厚幌1		14,946
13	100	ヲチャラセナイチャシ	母材山	下記に含む
14	101	ヲチャラセナイ	母材山	15,698
15	118	オニキシベ6	堤体付近	1,401
16	119	ｲｸﾊﾞﾝﾄﾞﾕｸﾁｾ2		1,174
17	120	ｲｸﾊﾞﾝﾄﾞﾕｸﾁｾ3		9,321
18	121	ショロマ3		1,350
19	122	ショロマ4		4,470
20	123	上幌内3		14,525
21	124	上幌内4		2,107
22	125	上幌内5		14,862
24	88	厚幌2	導水路事業	－
25	87	ｲｸﾊﾞﾝﾄﾞﾕｸﾁｾ1	常時満水以上	－
合　計				203,401

図Ⅰ-1　厚幌ダム建設事業関連埋蔵文化財包蔵地位置図

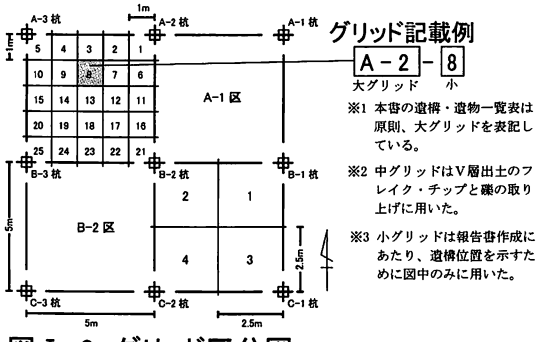


図Ⅰ-2 調査範囲・基準杭・試掘坑・位置図

表Ⅰ-1 グリッド設定関係杭座標一覧表

杭名	X座標	Y座標	Z座標
三級基準点 H8No.3-40	-136,044.378	-20,055.726	64.510
T-2	-136,010.747	-19,953.400	74.371
T-3	-135,896.042	-19,960.520	73.390
KH1-1	-135,840.695	-19,940.294	-
KH1-2	-135,849.526	-19,922.698	-
KH1-3	-135,869.726	-19,927.498	-
KH1-4	-136,051.526	-19,972.897	-
KH1-5	-136,062.651	-19,991.502	-
KH1-6	-136,058.226	-20,010.997	-
KH1-7	-136,049.526	-20,019.698	-
KH1-8	-136,033.826	-20,032.898	-
KH1-9	-136,029.026	-20,035.998	-
KH1-10	-136,018.226	-20,034.498	-
KH1-11	-136,003.825	-20,019.498	-
KH1-12	-135,985.325	-20,002.998	-
KH1-13	-135,970.625	-19,993.998	-
KH1-14	-135,933.725	-19,976.698	-
KH1-15	-135,895.625	-19,962.498	-
KH1-16	-135,871.725	-19,955.398	-

【大・中・小グリッド区分】



図Ⅰ-3 グリッド区分図

4. 整理作業

出土遺物の一次整理は、発掘調査段階から遺物水洗、調査区遺構名や層位、種別等の台帳確認作業、注記作業を行い、平成 28 年 11 月からの整理は本郷･軽舞地区の整理事務所で行った。報告書作成については平成 29 年度に軽舞遺跡調査整理事務所で図面、写真図版の修正を行った。

遺構図等の実測図編集やトレース図作成については、パソコンでのデジタル編集（Os Windows Adobe IllustratorCS6）で行った。出土遺物の写真撮影は（有）写真事務所クリークに委託し、パソコン（Os Windows Adobe PhotshopCS6）での背景の切抜き作業等を行っている。報告書掲載図や写真図版、一覧表の編集･版組みも上記のソフトウェアで行い、本文の Word 文書と合わせて印刷所へデジタル入稿した。

遺物の収納保管は、報告書掲載のものは図版毎に行い、それ以外のものは分類および調査区遺構毎にコンテナに収納した。報告書掲載遺物は軽舞遺跡調査整理事務所（旧軽舞小学校）、未掲載資料は旧鹿沼小学校に収蔵している。

第 4 節　遺物の分類

平成 28 年度調査で出土した遺物は、第Ⅶ群土器、フレイク･チップ類、礫のみである。第Ⅰ群～第Ⅵ群土器、剥片石器、礫石器は出土していないため、分類表は第Ⅶ群土器のみを示す。

なお、本調査において獣骨が少量出土した。これまで、同定作業は外部の専門家に委託していたが、数点に留まることから当方で保管しているシカやキツネなどの現生骨格標本から乾が同定作業を行った。

1. 土 器

第Ⅶ群土器　擦文文化期に属する土器群

A　北大Ⅲ式相当

B　擦文土器（甕形）

B1：擦文「前期」に相当するもの。

B2：擦文「中期」に相当するもの。

B3：擦文「後期」に相当するもの。

C　擦文土器（坏形）

D　擦文土器（鉢形･壷形）

E　ロクロ成形土器

第 5 節　調査結果の概要

1. Ⅲ層の調査

平成26年度の調査では、調査区南側と縁辺部を除いて畑の造成によって削平されており、Ⅲ層は残っていなかったが、平成28年度の調査範囲はA区とC区は耕作土造成範囲外であったため、B区を除いて、Ⅲ層が比較的よく残っていた。

A区からは、土器集中が2ヵ所検出された。当初、電柱設置の撹乱坑を挟んで同一の土器集中と思われたが、接合する資料は見られず、それぞれに遺構番号を付した。また土器集中の周辺からも土器片は出土したが、集中土器と接合する資料は皆無である。B区は、Ta-c上位まで削平されており、遺構・遺物は検出されなかった。C区からは、獣骨集中と杭列跡・杭跡を検出した。獣骨集中は平成26年度に調査したⅢBB-01A・B・Cの間から出土したため、ⅢH-01に関連すると思われ、獣骨集中ⅢBB-01D～Jを付番した。獣骨集中を精査した後、Ⅲc層（一部Ⅳ層）まで掘り下げ、遺構の確認作業を行った。その結果、南北方向に配列が見られる杭列跡と、これらの杭跡よりやや太い杭跡を検出した。

2. Ⅴ層の調査

Ⅲ層の調査終了後、Ⅳ層を人力で除去し、Ⅴ層の調査に入った。

A・C区からは遺構は検出されず、遺物はわずかにフレイク・チップ類、礫が数点出土したのみである。

B区では掘り上げ土を伴うTピットが1基検出された。周辺は畑の造成によってⅧb層まで削平されていたため、掘り上げ土の広がりは把握できなかった。Tピットは壁面が大きく崩れた楕円形の形状をなし、杭跡は検出されなかった。遺物は出土していない。　（宮塚）

表Ⅰ-2　上幌内1遺跡検出遺構一覧表

項　目	Ⅲ層	Ⅴ層
	続縄・擦文・アイヌ文化期	縄文時代
人力発掘調査面積	138㎡	
Tピット	-	1
杭列跡	1	-
杭　跡	5	-
土器集中	2	-
獣骨集中	(7)	-

※（ ）の数字は住居跡関連遺構に含まれる数

表Ⅰ-3　上幌内1遺跡出土遺物一覧表

層　位	種　別			合　計
	土器	フレイク・チップ類	礫	
	P	FC	S	
Ⅲ　層	270	0	18	288
Ⅴ　層	0	2	12	14
合　計	270	2	30	302

第 6 節　遺跡の位置

1. 厚真町の概要

A　地理的環境

厚真町は、石狩低地帯南部の東縁、北海道胆振総合振興局管内の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川流域に広がる、人口4,661人（平成29年12月現在）の農業の町である。町域の総面積は404.61㎢で、流路52.3kmの二級河川厚真川水系と同入鹿別川右岸に広がり南北32.5km、東西17.3kmと細長く、南部は約6.5kmにわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。

北部は夕張市や由仁町と接し、夕張山地南端域の標高200～600mの山地が続き、町域総面積

の約 70%を山林が占めている。東は夕張山地から続く低い山地を挟んでむかわ町と接し、北西は標高 100m 前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯（以下、苫東）内で苫小牧市と接する。厚真の語源は 3 説ほどあるが、有力な説としてアイヌ語の「アットマム」（at-to-mam･向こうの湿地帯）で、南部に広がる湿地帯に付けられたものが転訛したという（厚真村 1956）。

以下に厚真川中流域から本遺跡が所在する厚真川上流域にかけての概略を述べる。

厚真町の中心市街地は厚真川中流域にあり、鵡川地区、平取町、安平地区、浜厚真方面への道道交差部に官公署や住宅地が形成されている。かつては、町内の石油資源や林産資源、農産物の集散地として発展してきた。また、平成 3 年に日勝峠を含む「石勝樹海ロード」が全面開通する以前は札幌方面から厚真町市街地を通過し、日高･十勝へ抜けるルートともなっていた。地形的には厚真川本流と比較的大きな支流である知決辺川、ウクル川などの合流点に形成された平野部に位置し、夕張山地系と馬追丘陵南端部の山地性丘陵に挟まれた地域となる。中流域から上流域にかけては、厚真川は頗美宇川との合流点付近において流路方向を変え、左岸には河岸段丘が発達する。中流域最奥部の幌内地区は、厚真川流域沿いの沖積地の最奥部でもあり、本流とシュルク川、幌内川の 3 河川の合流点である。この地区は上流域の山間部より産出される豊富な林産資源の集積地として発展し、明治 44 年から昭和 24 年まで早来駅を結ぶ軌道が敷設されていた。これより上流域は、新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続く。山地は標高 400m 以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜で壮年期地形の様相を呈している。厚真川は夕張市、由仁町との 1 市 2 町の境界線付近、標高 500m 付近の夕張山地南域に源流部がある。

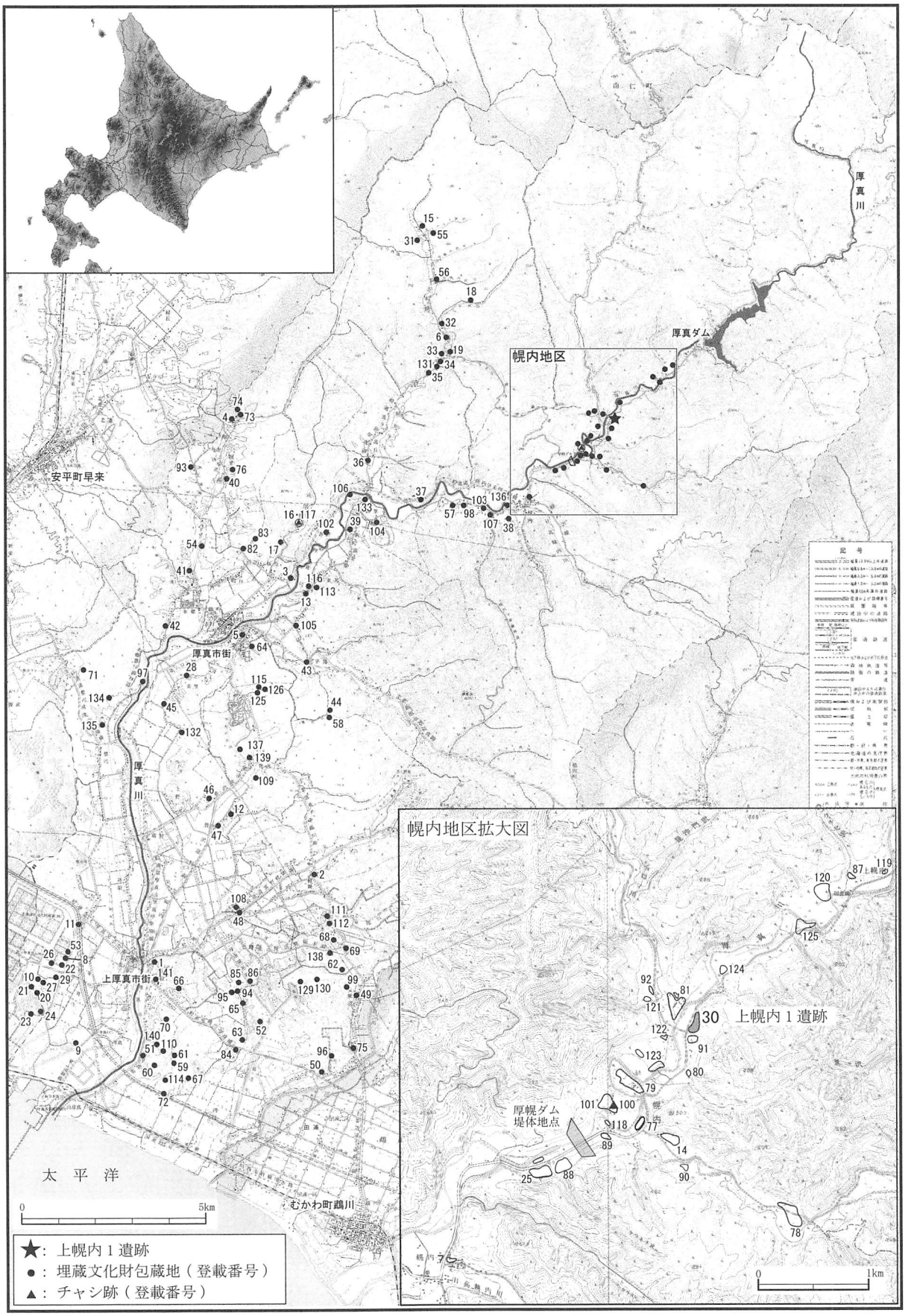
B　歴史的環境

(1)先史時代

厚真町内には現在 141 ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、後期旧石器時代から近現代の軌道跡やトーチカなど第二次世界大戦時の戦争遺跡までの時期幅がある（図Ⅰ-4、表Ⅰ-4･5）。遺跡の分布傾向は開発行為の多寡に左右されるが、南部の苫東地区と北部の高丘･幌内地区にやや密集する傾向がある。他の市町村と異なる特徴として、これらの北部地区の遺跡は安平町安平地区や夕張市紅葉山地区、むかわ町豊田･穂別･稲里地区に抜ける山越えのルート上の遺跡と思われる。

時期的には上幌内モイ遺跡で後期旧石器（札滑型細石刃核等）のブロックが調査されている。

縄文時代では浜厚真 3 遺跡で東釧路Ⅱ式土器がややまとまって出土している（道埋文 2003）。後続する東釧路Ⅲ式やコッタロ式土器が多量に出土する早期後葉の遺跡は、厚真川中流域以南に分布しており、上流域の幌内地区では、散発的な極少量の遺物が出土しているに過ぎない。上流域では、中茶路式期以降が遺跡の増加傾向にあり、厚真川流域において縄文時代の人の拡散を考えると、海岸部から内陸部への進出が想定できる。遺跡数の増加や規模の拡大は縄文時代前期前半の静内中野式期で、オコッコ 1 遺跡（107）、幌内 5 遺跡（57）ニタップナイ遺跡（104）、豊丘遺跡（69）、鹿沼 7 遺跡（99）などでは多量の被熱礫や哺乳網の焼骨片が出土しており、厚真町南部から北部に至るまで確認されている。この時期の遺跡は湧水地点に隣接する特徴的な立地で、鹿沼 7 遺跡や幌内 5 遺跡、ニタップナイ遺跡、オコッコ 1 遺跡では露頭



図Ⅰ-4 厚真町内遺跡分布図（平成 29 年 12 月 1 日現在）

表Ⅰ-4 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)

登載番号	種別	名称	時代	発掘調査年度
1	遺物包含地	上厚真遺跡	縄文中期、続縄文期、擦文期	
2	遺物包含地	軽舞遺跡	縄文中期、続縄文期	
3	遺物包含地	朝日遺跡	縄文中～晩期、続縄文期、擦文期、近代	2012・13
4	遺物包含地	幌里1遺跡	縄文中・晩期、続縄文期	
5	遺物包含地	新町遺跡	縄文早・中期、続縄文期、アイヌ期	
6	遺物包含地	高丘1遺跡	縄文中期・続縄文期、擦文期、アイヌ期	
7	遺物包含地	幌内1遺跡	縄文中・後期	
8	集落跡	共和遺跡	縄文晩期、続縄文期、擦文期	1978
9	遺物包含地	浜厚真遺跡	詳細不明	
10	溝穴遺構	厚真10遺跡	縄文中・晩期	1977・78
11	遺物包含地	厚真11遺跡	縄文時代	
12	遺物包含地	豊沢1遺跡	続縄文期	
13	遺物包含地	東和遺跡	縄文後期	
14	集落跡	オニキシベ1遺跡	縄文早～晩期、擦文期	2012・13
15	遺物包含地	高丘3遺跡	縄文中期	
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	中世アイヌ期	
17	遺物包含地	桜丘1遺跡	縄文晩期	
18	遺物包含地	高丘2遺跡	詳細不明	
19	集落跡	高丘10遺跡	詳細不明	
20	集落跡	厚真1遺跡	縄文中期	1976
21	溝穴遺構	厚真2遺跡	縄文時代	1977
22	溝穴遺構	厚真3遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期	1978・79
23	集落跡	厚真4遺跡	縄文中・後期、続縄文期、近代	
24	遺物包含地	厚真5遺跡	縄文時代、続縄文期	
25	集落跡	厚幌1遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、中・近世アイヌ期	2002・03・08・12・13・15
26	集落跡	厚真7遺跡	縄文早・中～晩期、続縄文期、擦文期	1977・78
27	集落跡	厚真8遺跡	縄文早・中～晩期、続縄文期	1977
28	溝穴遺構	美里2遺跡	縄文早・中期	
29	墳墓	厚真12遺跡	縄文早・後・晩期、擦文期	1979
30	集落跡	上幌内1遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2014・16
31	遺物包含地	高丘4遺跡	縄文時代	
32	遺物包含地	高丘5遺跡	縄文時代	
33	遺物包含地	高丘6遺跡	縄文時代	
34	遺物包含地	高丘7遺跡	縄文中期	
35	遺物包含地	高丘8遺跡	縄文時代	
36	遺物包含地	高丘9遺跡	続縄文期	
37	遺物包含地	富里1遺跡	縄文中・後・晩期、アイヌ期	2015・16
38	遺物包含地	幌内4遺跡	縄文中期?	
39	遺物包含地	チコマナイ遺跡	縄文時代	
40	遺物包含地	幌里2遺跡	縄文中期	
41	遺物包含地	本郷1遺跡	縄文中・晩期	
42	遺物包含地	本郷2遺跡	縄文後期	
43	遺物包含地	宇隆1遺跡	擦文期	
44	遺物包含地	宇隆2遺跡	縄文後期	
45	遺物包含地	美里1遺跡	縄文中期	
46	遺物包含地	豊沢2遺跡	擦文期	
47	遺物包含地	豊沢3遺跡	続縄文期	
48	遺物包含地	鯉沼1遺跡	詳細不明	
49	遺物包含地	鹿沼2遺跡	縄文中期	
50	遺物包含地	鹿沼1遺跡	縄文早期	
51	遺物包含地	厚和1遺跡	縄文中期、アイヌ期	
52	遺物包含地	鹿沼3遺跡	縄文中・晩期	
53	溝穴遺構	厚真13遺跡	縄文早期	1980
54	遺物包含地	本郷3遺跡	縄文時代	
55	遺物包含地	高丘11遺跡	縄文晩期	
56	遺物包含地	高丘12遺跡	縄文時代	
57	墳墓	幌内5遺跡	縄文前期、近世アイヌ期	2009
58	溝穴遺構	豊沢4遺跡	縄文早・後期	
59	遺物包含地	厚和2遺跡	縄文中期	
60	遺物包含地	厚和3遺跡	縄文後期	
61	遺物包含地	厚和4遺跡	縄文中期	
62	遺物包含地	鹿沼4遺跡	縄文時代	
63	遺物包含地	厚和5遺跡	縄文時代	
64	遺物包含地	新町2遺跡	縄文後期	
65	遺物包含地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
66	遺物包含地	厚和6遺跡	縄文前期	
67	遺物包含地	浜厚真2遺跡	縄文早期	
68	溝穴遺構	鯉沼2遺跡	縄文時代	1999・2000
69	遺物包含地	豊丘遺跡	縄文前期	
70	集落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
71	集落跡	豊川1遺跡	縄文前～後期	2000
72	溝穴遺構	浜厚真3遺跡	縄文早期	2002
73	遺物包含地	ニタッポロ沢遺跡	縄文後・晩期	
74	遺物包含地	幌里神社遺跡	縄文時代	
75	溝穴遺構	入鹿別沼遺跡	縄文中期	
76	溝穴遺構	幌里3遺跡	縄文時代	
77	集落跡・墳墓	オニキシベ2遺跡	縄文中・後期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2007・08
78	遺物包含地	オニキシベ3遺跡	縄文後期	2014-16
79	集落跡・墳墓	上幌内モイ遺跡	旧石器、縄文早・中～晩期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2004-07
80	溝穴遺構	一里沢遺跡	縄文時代、アイヌ期	2014
81	集落跡	ショロマ1遺跡	縄文前・後期、続縄文期、擦文期、アイヌ期	2013-16
82	遺物包含地	東ニタッポロ1遺跡	縄文中・晩期	
83	遺物包含地	東ニタッポロ2遺跡	縄文中・晩期	
84	遺物包含地	浜厚真4遺跡	縄文中期	
85	集落跡	鯉沼3遺跡	縄文前～後期	2006・07
86	遺物包含地	鯉沼4遺跡	縄文後期	
87	遺物包含地	イクバンドユクチセ遺跡	縄文後期	
88	溝穴遺構	厚幌2遺跡	縄文前期	2015-17
89	集落跡	オニキシベ4遺跡	縄文早・中～晩期、続縄文期、擦文期、近代	2012
90	集落跡	オニキシベ5遺跡	縄文中期・後期	2010・11
91	集落跡・墳墓	上幌内2遺跡	縄文早～後期、続縄文期、擦文期、アイヌ期	2014・16
92	集落跡	ショロマ2遺跡	縄文早～後期	2013・14
93	溝穴遺構	幌里4遺跡	縄文時代	
94	集落跡	厚和8遺跡	縄文中・後期	
95	遺物包含地	厚和9遺跡	縄文中期	
96	遺物包含地	鹿沼6遺跡	縄文時代	
97	遺物包含地	豊川2遺跡	続縄文期、擦文期	

表Ｉ-5 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2)

登載番号	種別	名称	時代	発掘調査年度
98	集落跡	幌内6遺跡	縄文前～晩期、擦文期、中世アイヌ期	2015
99	集落跡	鹿沼7遺跡	縄文早～晩期	
100	チャシ跡	ヲチャラセナイチャシ跡	中世アイヌ期	2008・10
101	集落跡	ヲチャラセナイ遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2008-12
102	遺物包含地	吉野1遺跡	縄文中・晩期	
103	集落跡	幌内7遺跡	縄文前～晩期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2008・15・16
104	集落跡	ニタップナイ遺跡	縄文前～晩期、続縄文期、擦文期、近世アイヌ期、近代	2007・08
105	遺物包含地	宇隆3遺跡	縄文中期	
106	集落跡	富里2遺跡	縄文後・晩期、擦文期、近世アイヌ期	2009
107	集落跡・墳墓	オコッコ1遺跡	縄文前～後期、擦文期、中世アイヌ期	2015・16
108	遺物包含地	軽舞2遺跡	縄文前期、続縄文期	
109	遺物包蔵地	豊沢5遺跡	縄文後・晩期	2016
110	遺物包含地	厚和10遺跡	縄文早・中・後期	
111	溝穴遺構	豊丘2遺跡	縄文早期	2017
112	遺物包蔵地	豊丘3遺跡	縄文中期	
113	遺物包蔵地	東和2遺跡	縄文晩期	
114	遺物包含地	浜厚真5遺跡	縄文後期	
115	遺物包蔵地	豊沢6遺跡	縄文早・中・後期	
116	遺物包蔵地	東和3遺跡	縄文早期	
117	遺物包含地	桜丘2遺跡	縄文中期	
118	遺物包含地	オニキシベ6遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期	2012
119	溝穴遺構	ｲｸﾊﾞﾝﾄﾞﾕｸﾁｾ2遺跡	縄文早・中～晩期	2013
120	集落跡	イクバンドユクチセ3遺跡	縄文中・後期、擦文期、中世アイヌ期	2013
121	集落跡・墳墓	ショロマ3遺跡	縄文早～後期、続縄文期、擦文期	2013
122	集落跡・墳墓	ショロマ4遺跡	縄文早・中・後期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2014
123	集落跡・墳墓	上幌内3遺跡	縄文中・後期、続縄文期、擦文期、中・近世アイヌ期、近代	2013・14
124	遺物包含地	上幌内4遺跡	縄文中期、中世アイヌ期	2014-16
125	溝穴遺構	上幌内5遺跡	縄文時代	2013・15・16
126	遺物包含地	豊沢7遺跡	縄文中・後期	
127	遺物包含地	豊沢8遺跡	縄文後期	
128	遺物包含地	ヲイカルマイ遺跡	続縄文期、擦文期、中・近世アイヌ期、近代	2010・11
129	遺物包含地	長沼1遺跡	縄文早期	
130	遺物包含地	長沼2遺跡	縄文中期	
131	遺物包含地	高丘13遺跡	縄文前期、擦文期	
132	遺物包含地	上野1遺跡	縄文中期	
133	遺物包含地	富里3遺跡	縄文中・晩期、中・近世アイヌ期	2015
134	遺物包含地	豊川3遺跡	縄文晩期	
135	遺物包含地	三ヶ月沼遺跡	縄文晩期	
136	遺物包含地	幌内8遺跡	縄文前・中期	
137	遺物包含地	豊沢9遺跡	縄文時代	
138	溝穴遺構	鯉沼5遺跡	縄文時代	
139	遺物包含地	豊沢10遺跡	縄文後期	2017
140	溝穴遺構	厚和11遺跡	縄文時代	
141	溝穴遺構	厚和12遺跡	縄文時代	

や発掘・試掘調査で「盛土遺構」を伴うことが判明している。これ以降、漸移的に遺跡数が増加し、中期末葉から後期初頭の北筒・余市式期で遺跡数がピークとなる。縄文時代後期中葉から後葉にかけては遺跡数が激減し、晩期前葉に再び増加する傾向にある。続縄文文化期から擦文文化期前期にかけての遺跡数も少ない。この様な各時期における遺跡数の偏りは隣接する苫小牧市の傾向と一致している。しかし、厚真町内では白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）降下（10 世紀前葉）以降の擦文中期以降に再び遺跡数が増加する点において、隣接する苫小牧市とは異なる様相を示している。アイヌ文化期についても、厚幌ダムや厚幌導水路建設事業に伴う発掘調査で 13 世紀以降 17 世紀中葉に至るまでの数多くの遺構・遺物が検出されており、中世アイヌ文化期の一様相の解明に期待が高まっている。

(2)町内における埋蔵文化財調査の概要

町内における埋蔵文化財の調査・研究・活用は、大正 5 年、現在の朝日遺跡から出土した縄文土器を、教材として学校に保管する許可書が発行されたのが最初である（厚真村郷土研究会 1956）。これ以降、現在に至るまでを大きく 3 期に別けることが可能である。

a. 厚真村郷土研究会・埋蔵文化財の地域自主的研究（昭和 20 年代後半から 40 年代中頃）

元厚真村長 亀井喜久太郎氏が昭和 28 年に厚真村郷土研究会を発足させ、遺物の収集や会報での遺物紹介を行い、昭和 31 年には『厚真村古代史』を発刊した（厚真村郷土研究会 1956）。また分布調査なども積極的に行い、埋蔵文化財包蔵地カードの「調査・文献」には「厚真村郷

土研究会」の記載で始まるものが32遺跡もあり、厚真町の文化財保護・研究に大きな功績を残している。

b. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター・大規模発掘「苫東調査」（昭和48年から昭和59年）

昭和48年から苫小牧市埋蔵文化財調査センターによる苫東地区の試掘・発掘調査が開始され、59年までの12年間で厚真町域では新規登載14遺跡、調査着手11遺跡があり、縄文時代早期～擦文文化期までの資料が得られている。昭和51年調査の厚真1遺跡（苫小牧市教育委員会1986）では、この地域で初めてのTピットが確認され、縄文時代中期中葉の「厚真1式土器」（赤石1999）の標識遺跡でもある。厚真7遺跡では縄文時代中期末葉と後期前葉の住居跡8軒、石狩川中流域を中心に分布する「丸のみ形石斧」も出土した（苫小牧市教育委員会1987）。共和遺跡では苫東地区内で唯一の擦文文化期前期の竪穴式住居跡2軒を調査している（苫小牧市教育委員会1987）。

c. 開発に伴う調査の増加と厚幌ダム・厚幌導水路事業の開始（平成10年以降）

道教委による豊川1遺跡、鯉沼2遺跡などの調査が行われたほか、高規格道路日高自動車道の建設に伴う浜厚真3遺跡の調査では、187基のTピットが検出されている（道埋文2003）。

平成12年にはダム事務所より厚幌ダム建設事業に係る事前協議書が提出され、A・B調が開始された。発掘調査は平成14年から町教委により継続的に行われ、上幌内モイ遺跡、オニキシベ2・4・5・6遺跡、上幌内1・2遺跡、ショロマ1・2・3遺跡、厚幌1遺跡、ヲチャラセナイチャシ跡、ヲチャラセナイ遺跡、一里沢遺跡など14遺跡の発掘調査を終えている。また平成24年度からは道埋文も本事業の調査に入り、平成28年度までの15年間の調査総面積は約200,000㎡である。

平成15年には総延長24.5kmに及ぶ厚幌導水路建設事業の事前協議書が提出され、B調等は未了箇所があるものの、平成30年1月現在で1遺跡での要発掘・工事立会調査地点が確認されている。平成19年度から発掘調査が開始され、厚真川下流域の豊丘2遺跡、豊沢5・10遺跡、中流域富里地区のニタップナイ遺跡、富里1・2・3遺跡、幌内地区の幌内5・6・7遺跡、オコッコ1遺跡や厚幌1・2遺跡で発掘調査を行った。これらの大規模開発に伴う発掘調査は、平成31年度までに整理業務を終え、厚幌ダム・厚幌導水路建設事業に係る一連の埋蔵文化財発掘調査業務を完了する予定となっている。

(3)歴史時代

厚真町に係わる最初の記述は、1692（元禄5）年に書かれた『続々類従本蝦夷記』でシャクシャインの戦いにおいて「於多久見具印住處阿津摩ニテ討取ル」というものである（野澤1692）。その後、寛政年間（18世紀末）に八王子千人同心等数名の和人が浜厚真に移り住むが定住することはなかった。近世アツマ場所の産物としては、干鮭や椎茸、シナ縄が記されているが、詳細な記述はなく、紀行文や測量日誌に交通路であった勇払と鵡川間の厚真川河口周辺や千歳と日高間の富里地区の簡単な記述に留まっている。

内陸部まで詳述したものは、松浦武四郎による『戊午安都麻日誌』（松浦・吉田1962、松浦・高倉1985）で、1857（安政5）年6月に勇払から厚真川河口を経てトンニカ（現富里）にて3泊している。この時、町内にはアツマ（厚真河口）、キムンコタン（現厚和・厚和1遺跡）、シナイ（現新町・新町遺跡）、チケツヘ（現本郷）、トンニカ（現富里）、ニタツナイ（現富里・ニタップナイ遺跡周辺）の5ヵ所のコタンが記

録されている。この中で比較的規模の大きいキムンコタンやトンニカコタンでは、粟、稗、隠元、蕪などの畑作が盛んで、漆器や刀剣類の宝物が多く、これまでの地域とは別格として記している。しかし直前に襲った厚真川の氾濫によって、畑地のほとんどが流されていることも記されており、かつてより洪水の多い河川であったことが伺える。上流部に関しては聞き取りによるもので、夕張方面への交通路やシカやワシ・タカ類の狩猟に関する記述がある。武四郎の日誌からは、上流域におけるこの時期の集落跡は存在せず、無人地帯となっていたことがわかり、中世アイヌ文化期から近世アイヌ文化期にかけて厚真川流域における社会・集落構造の変容が分かりつつある。

これらの記録以前のアイヌ文化期については、本遺跡を含め厚幌ダム水没地域内の試掘・発掘調査で確認された上幌内モイ遺跡、オニキシベ2遺跡、ヲチャラセナイチャシ跡、ヲチャラセナイ遺跡、上幌内2遺跡、導水路事業で富里2遺跡、ニタップナイ遺跡などのほか、厚和1遺跡、幌内5遺跡では耕作により近世アイヌ期の土坑墓が単独で発見されている。

2. 遺跡の位置と周辺の環境

A 地理的環境

遺跡の周辺地域を幌内市街地より厚真川上流域で現存する厚真ダムまでの範囲とし、この範囲は行政区画上、厚真町字幌内地番であるが、以後、便宜的に「厚幌地区」と称する。厚幌地区には比較的大きな支流である鬼岸辺川、ショロマ川がある。分水嶺を介して鬼岸辺川は東方の鵡川水系むかわ町豊田地区へ、ショロマ川は分水嶺を越えて石狩川水系夕張市滝之上地区へのルートが想定される。この他、ショロマ川との合流点より約4.8km上流、厚真ダム左岸の支流メルクンナイ川も鵡川水系むかわ町穂別地区へのルートとして考えられる。厚幌地区は標高約150～250mの山頂に囲まれ、厚真川が浸食開折した谷状の地形で緩やかに傾斜する“線状”の地域となっており、遺跡群は流域に形成された河岸段丘上に立地している。厚真川流域の段丘面は上流～中流域まで発達し、厚真川上流域の上幌内モイ遺跡周辺の段丘面を標識としてT_0～T_5面に細分されている（出穂2006）。本流河川面との比高差や支笏、恵庭、樽前の各火山灰の堆積状態から離水時期がわかり、他地域よりも詳細に把握することができる。支流域まで含めた詳細な検討はされていないものの、概ね連動していると思われる。

本遺跡は夕張山地南端部、厚真川河口から約35.6kmに位置し、厚真川の左岸に所在している。段丘面T_2（現地表面標高約68～71m）とT_1（現地表面標高約65m）に遺跡は形成されている。段丘面は南端部から厚真川本流沿いの北北東方向に約215m、幅約30-70mと段丘面T_2が形成されている。このT_2面南端部に南北軸を長軸とする狭小な低位段丘面T_1が形成されている。なお、西に隣接する厚真川との比高差はT_1面で4～5m、T_2面で12m前後となっている。

本遺跡の周辺環境として、厚真川とショロマ川との合流点の東側に位置する北側にはショロマ川を挟んで、標高85m前後の段丘面T_4、標高95m前後の段丘面T_5が続き、標高290mの山頂へと続く山体がある。ショロマ川の右岸には標高300m前後の南北に連なる山稜があり、東側には標高200～260mの山体によって三方向を囲まれている。本遺跡の南から南西方向にかけては広い氾濫原が形成され、谷状地形によって日照条件は好条件となっている。

B　歴史的環境

厚幌地区には、後期旧石器時代から中近世アイヌ文化期までの時期にわたる 24 遺跡と 1 ヵ所のチャシ跡が所在する（図Ⅰ-1）。最上流のイクバンドユクチセ 2 遺跡（J-13-87）は厚真川の河口より約 37km の地点にあるが、さらに約 1.5 km上流に位置する厚真ダム堤体付近にも遺跡が所在していたという。全ての調査が終了し本地区の特徴が見え始め、時期的な特徴として縄文時代の遺跡は中茶路式期以降であり、これ以前の東釧路系土器群や貝殻文系土器群はほぼ皆無に近い。また、中茶路式と東釧路Ⅳ式土器がセットとなって出土し、これらに石英結晶粒を多量に含む富良野盆地系土器が伴う。これに対し、厚真川中下流域や苫小牧市苫東地区での試掘・発掘調査ではコッタロ式や東釧路Ⅲ式、貝殻文・条痕文系土器群の遺跡が確認されており、厚真川流域においては海岸部から上流域への縄文文化の進入拡散が想定される。後続する縄文前期前半期も遺跡や出土遺物が少ない傾向にあり、本地域での遺跡数や遺構数増加は縄文時代前期後葉の植苗式から円筒土器上層 a 式期にみられ、平成 20～24 年度にかけて発掘調査したヲチャラセナイ遺跡も当該期の集落跡である（町教委 2013・2014）。また縄文時代後期初頭から前葉にかけての余市式土器群も各遺跡から出土しており、この時期の富良野盆地系土器も多産している。時期の偏りが見受けられると同時に富良野盆地系土器が伴う特徴も見逃せない。また擦文文化期中期後半以降、中世アイヌ文化期に至るまでの遺跡数も多い。発掘調査が行われた遺跡は本遺跡の他、厚幌 1 遺跡、上幌内モイ遺跡、オニキシベ 2 遺跡、上幌内 2 遺跡などがあり、平成 20・22 年度にはヲチャラセナイチャシ跡も全面発掘調査されている。しかし、17 世紀前葉以降のアイヌ文化期の遺跡数は極端に減少し、本地区での寛永通寶や煙管の出土例は今のところ確認されていない。1667 年降下の樽前 b テフラを直接被覆する大木に伴うシカ送り場跡が確認されていることから、本地区は集落居住域から後述する狩猟区域として位置づけを変えていった可能性が見えてきている。

C　松浦武四郎の記録とアイヌ語地名

この地区でのアイヌ文化に係わる記録としては、先述の松浦武四郎の記録が最も古い。本地区にはヲチャラセナイやカニシユウ（現一里沢遺跡）、ヲニケレベ（現鬼岸辺）、ショウロマ（現ショロマ）、メルクンナイなどの多数の地名が記載されている。特徴としては、「ル」（路）の付く地名が多く、複数の山越えルートが存在する地域でもある。厚真川から鵡川水系へは厚真ダム左岸のメルクンナイ～鵡川水系穂別川へのパンケオビラルカ川へ、鬼岸辺川～良樹ノ沢（ルーマキウシ）～鵡川～パンケルベシベ川～沙流川水系オサチナイ沢川へのルートが想定される。

シヨロマ（現ショロマ川）も厚真村史では「草ソテツの群生するところ」とあるが、ソ（滝）・ル（路）・マ（泳ぎ渡る）とも読み取れる。明治 29 年発行の地形図には「ショルマ」と記載されており、かつては滝瀬の中を馬車道として木材や木炭を運び出したこと、明治・大正期の夕張山地への熊狩の記録（厚真村史 1956）から、夕張川水系滝ノ上地区於兎牛（おそうし）へのルートが想定される。現在は「厚真川林道」で通り抜けることが可能で、ショロマ川合流点からは徒歩で約 6 時間の距離にある。

これらのルートは厚真川本流とオニキシベ川との合流点付近で 1 本となり、対岸に位置するヲチャラセナイチャシ跡は早来方面と鵡川流域、沙流川流域や日高方面、夕張方面への全ての

ルートが把握できる地点に立地している。人やモノの流れにおいて厚幌地区が重要な位置にあったことも容易に想定でき、考古学的にも縄文時代早期からの富良野盆地系土器や道東北地域の縄文土器、黒曜石原石、豊富な金属製品の出土がその証拠ともなろう。

ショロマ川流域に関する武四郎の記述は「西岸川巾五六間、急流峨々たる山の間より落来るとかや。是滝川に成るより号るとかや。」と記され、この流域について「マタヤツチセ　是冬分鷲、熊等を取に来りし時の小屋」、「ソウ　滝に成て此処に落る。少し此辺より上一面の椴木立に成り」、「ベンケヤツチセ　是も猟師の立置処～中略～うしろはユウハリのソウホコマナイのうしろに当るとかや」と3つの地名等を書き記している。この記述からも夕張へのルートの他、鷲鷹、熊猟の地域でもあることが記されている。なお、ユウハリのソウホコマナイ（草木舞川）には夕張市滝ノ上チャシ跡が所在している。（乾）

3. 調査区内の地形と地質

A　地形

発掘調査区の標高は67.5～73.5m、大半が段丘面T_2面（標高69m以上）に属する。T_2面はⅧ層の樽前dテフラ降下によって離水した段丘面で、ショロマ1遺跡他で確認された樽前dテフラ降下後に発生したイベント堆積物の洪水堆積層（Ⅶ層）は見られない。遺跡の南端、進入路の付近にわずかなT_1面が残り、縄文時代後期前葉の土器集中を検出したが、Ⅶ・Ⅷ層は見られず、河川の浸食を受けていたことがわかる。調査区西側は厚真川の氾濫原となり、段丘崖は大きく切土掘削され、一部に段丘基盤層（シルト層・礫層）が露出している。

本遺跡と上幌内2遺跡との間には厚真川に注ぐ沢が開析している。本遺跡の南側や上幌内2遺跡の北側は基層の礫層が盛り上がっており、樽前d層以降も同様に盛り上がって整層堆積しているので、樽前d層堆積以前に扇状地地形を形成していたことが分かる。

図Ⅰ-5に本遺跡周辺の地形面区分図と地形断面図を提示した。

本遺跡は厚真川とショロマ川の合流部に位置し、近隣にはショロマ3遺跡・一里沢遺跡（T_3面）・ショロマ1遺跡（一部T_1.T_2.T_4面）・ショロマ2遺跡・上幌内2遺跡・ショロマ4遺跡・上幌内3遺跡（T_2面）が所在する。

ショロマ2遺跡から上幌内1遺跡の断面（厚真川・ショロマ川の横断面）を見ると、ショロマ2遺跡の南側とショロマ1遺跡のショロマ川側にはⅦ層（樽前d再堆積層）が厚く堆積し、この範囲にはⅧ層（樽前dフォールユニット）は存在しない。Ⅶ層が分布している箇所以外のT_2面はⅧ層が整層堆積している。

ショロマ1遺跡のⅦ層分布範囲を見ると、ショロマ3遺跡の南に位置する沢の正面にあたり、ショロマ1遺跡の西側がこの沢の攻撃斜面になっていることが分かる。Ⅶ層を含む土石流は樽前dテフラ降下後にショロマ1遺跡の西側を一部覆ったものと思われる。Ⅶ層とⅧ層の間に腐植土層が見られないことから、土石流の発生時期については、火山灰降下直後あるいはその後（比較的短期）と思われる。

T_1面にはⅦ・Ⅷ層は認められない。粘土質シルト層や礫層を基盤層としている。Ⅶ・Ⅷ層はその後の河川浸食によって流失したものと思われる。

上幌内1遺跡ではⅦ層が存在しなかった。縄文時代包含層であるⅤ・Ⅵ層の下位はⅧ層であり、以下、段丘基盤層である粘土質シルト層や礫層が続く。

B　地質

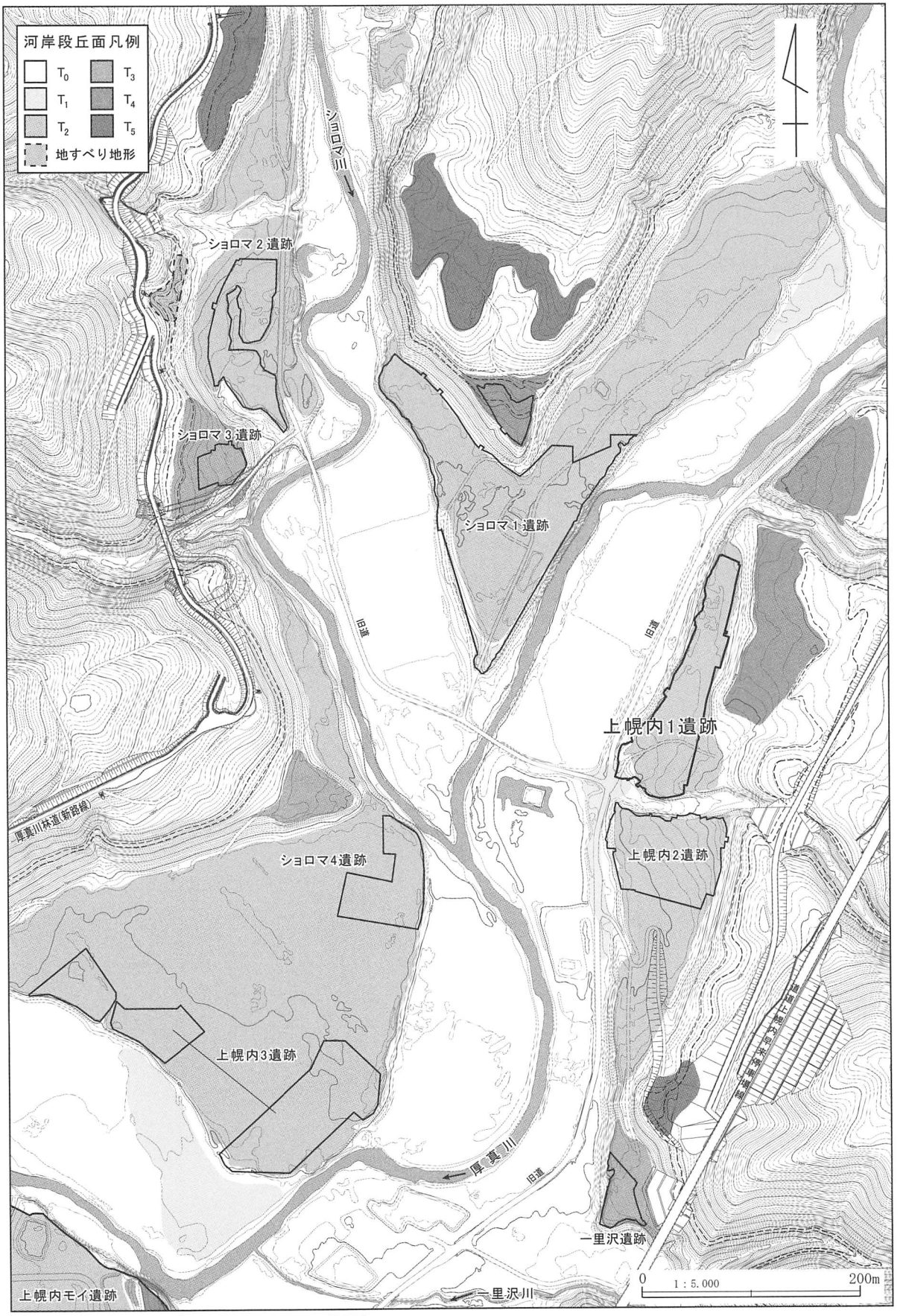
前述では、遺跡形成以前の河岸段丘面の微地形について堆積状態も含め記述したことから、ここでは表土層から縄文時代早期後葉の遺物が出土するⅥ層漸移層までの堆積状態について記載する。

本遺跡は近世アイヌ文化期に降下堆積した樽前山、駒ヶ岳のテフラや上層黒色土Ⅲ層は宅地・耕地の造成の削平等によって遺失している範囲が広かった。通常は表土層直下にⅡa 層の樽前 a テフラ（Ta-a・1739 年降下）やⅡd 層の樽前 b テフラ（Ta-b・1667 年降下）が面的に堆積し、2 層の間にⅡc 層の駒ヶ岳 c2 テフラ（Ko-c_2・1694 年降下）が不連続に挟在している。また、樽前 b テフラの直下には有珠 b テフラ（Us-b・1663 年降下）が数ミリ程度の層厚で確認できるところもある。

これらの近世アイヌ文化期の火山灰層は通常 20～30cm の層厚で堆積している。近世火山噴出物の堆積層以下に遺物包含層となる黒色腐植土Ⅲ層とⅤ層、その間にⅣ層の樽前 c テフラ（Ta-c・B.P.2500 年前後に降下）が堆積している。さらにⅤ層・Ⅵ層の下に樽前 d テフラⅧ層（Ta-d・8000 年前降下）が堆積している。Ⅷ層は d1 と d2 の 2 層のユニットで堆積しており、樽前山起源の噴出物が計 4 層堆積している。このほかⅢ層中に白頭山苫小牧火山灰（B-Tm・10 世紀前半降下）が倒木痕の窪みなどに堆積している。

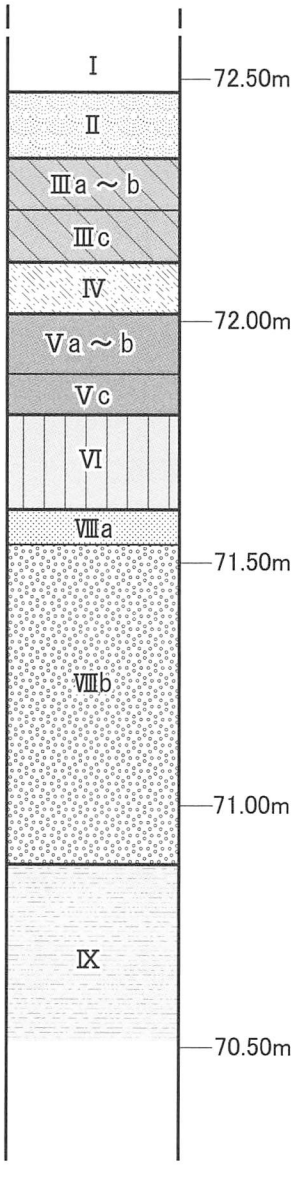
図Ⅰ-6 に本遺跡の基本土層を示した。平成 28 年度の調査では調査範囲が限定的であり、過年度に土層断面を記録し報告しており（町教委 2015）、火山灰以下の堆積環境においても同様である。

（宮塚）



図Ⅰ-5 周辺の遺跡と地形面区分図

〔上幌内１遺跡基本土層〕



Ⅰ層 ： 近現代表土　7.5YR3/1 黒褐色砂質土

Ⅱ層 ： 近世火山噴出物及び黒色砂質腐植土
- a ； 樽前ａテフラ（Ta-a）10YR6/4 にぶい黄橙色 砂質降下火山灰 1739 年降下。部分的に堆積。層厚 5cm 前後。
- b ； 黒色砂質腐植土層 10YR2/1 黒色 新千歳空港（美沢川流域の遺跡群）の調査における０黒層相当。
- c ； 駒ケ岳 c_2 テフラ（Ko-c_2）10YR8/3 浅黄橙色 砂質降下火山灰 1694 年降下。Ⅱb 層中において部分的に堆積している。
- d ； 樽前ｂテフラ（Ta-b）2.5YR7/3 浅黄色 細礫質降下軽石 1667 年降下。層厚 20cm 前後。

Ⅲ層 ： 黒色腐植土
新千歳空港（美沢川流域の遺跡群）・苫小牧東部工業地帯の遺跡群の調査におけるⅠ黒層相当。
- a ； 砂質シルト 7.5YR2/1 黒色 Ⅱd 層を斑状に含む。層厚 1 cm 前後。やや赤味あり。近世初頭の遺物包含層。
- b ； シルト 10YR1.7/1 黒色 やや粘性あり。層厚 5cm 前後。上位から中位が中世アイヌ文化期の遺物包含層。下位が擦文文化期包含層。Ⅲb 層とⅢc 層との層境に白頭山苫小牧火山灰（B-Tm シルト質降下火山灰 10c 前半降下）が部分的に堆積する。
- c ； 砂質シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 15cm 前後。続縄文～縄文晩期後半の包含層。

Ⅳ層 ： 樽前ｃテフラ（Ta-c）10YR6/6 明黄褐色 砂質降下軽石 B.P. 2,500 年前後降下。層厚 20cm 前後。一層のﾌｫｰﾙ･ﾕﾆｯﾄ。

Ⅴ層 ： 黒色腐植土
新千歳空港（美沢川流域の遺跡群）・苫小牧東部工業地帯の遺跡群の調査におけるⅡ黒層相当。
- a ； シルト 10YR3/2 黒褐色 層厚 2cm 前後。縄文晩期前半の遺物包含層。
- b ； シルト 10YR1.7/1 黒色 層厚 25cm 前後。縄文中･後期の遺物包含層。
- c ； シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 15cm 前後。縄文前･中期の遺物包含層。

Ⅵ層 ： 漸移層 2.5YR4/6 赤褐色シルト。層厚 30cm 前後。縄文早期の遺物包含層。

Ⅷ層 ： 樽前ｄテフラ B.P.8,000 年前後降下。
- a ； 樽前 d_1 テフラ（Ta-d_1）5G4/1 暗緑灰色 細礫質降下スコリア（φ5↓ sfa *1）層厚 10cm 前後。（本遺跡ではⅥ層中に混在するため、単層では堆積していない。）
- b ； 樽前 d_2 テフラ（Ta-d_2）5YR4/8 赤褐色 中礫質降下パミス（pfa *2）層厚 120cm 前後。部分的に水成風化による粘土化。

（*1･2 町田･新井　1992）

Ⅸ層 ： 河岸段丘基盤層　青灰色粘土質シルト層や礫層。

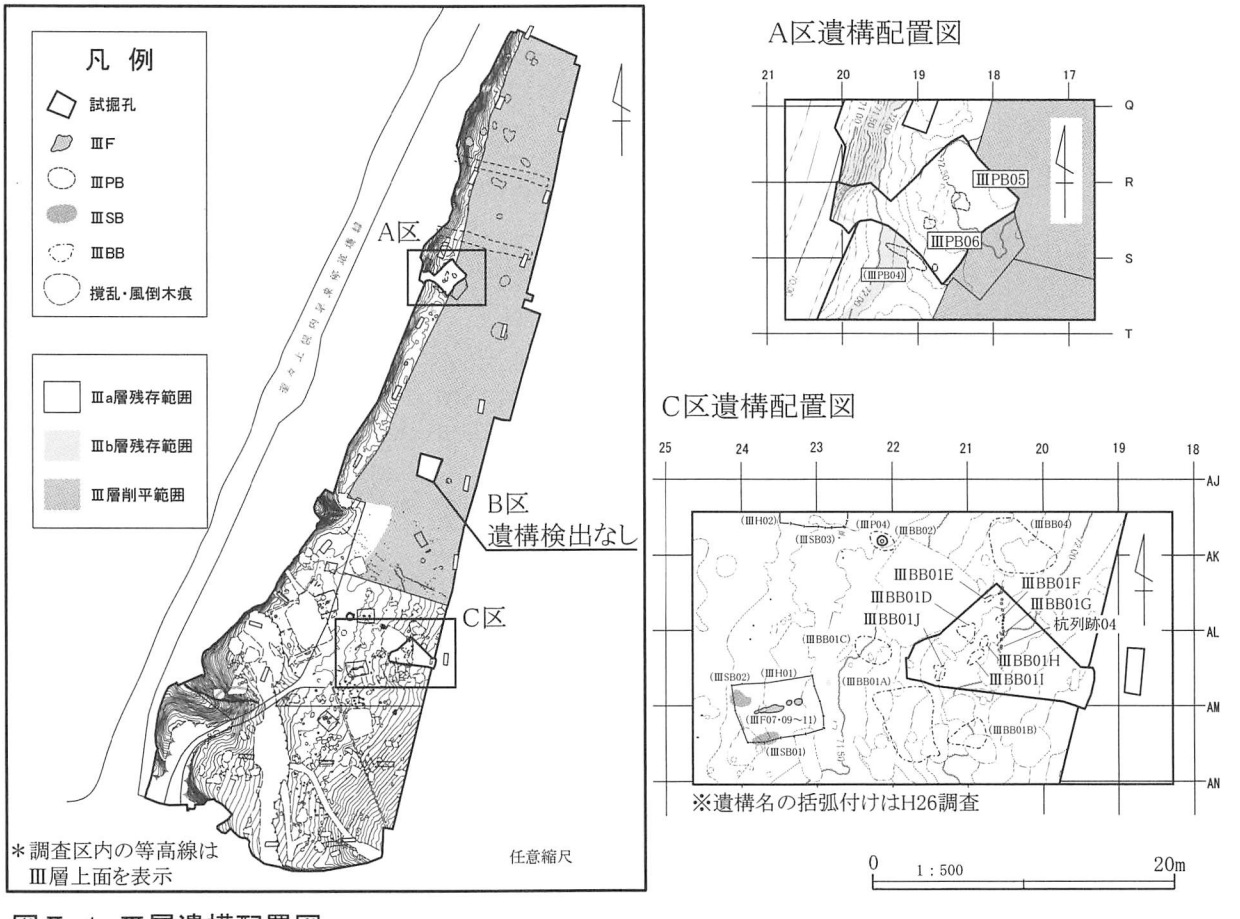
図Ⅰ-6 基本土層柱状図

第Ⅱ章　Ⅲ層の調査

本章で取り扱う遺構及び遺物は、Ⅲb・Ⅲc 層で検出したものである。杭跡は一部、Ⅳ層でプランを確認した。平成 28 年度の調査は電柱設置部分３ヵ所であったが、そのうちの１ヵ所（B 区）からは遺構・遺物は検出されなかった。遺構はＡ区に土器集中２ヵ所、Ｃ区に獣骨集中１ヵ所、杭列跡１条、杭跡５基である。獣骨集中と杭列跡は位置や出土層位から平成 26 年度に調査したⅢH-01 に関連する遺構と考え、獣骨集中はⅢBB-01 の続き番号（D～J）を付番した。杭跡は 20 基検出しているが、列状に並ぶ 15 基を杭列跡 04 とし、他を杭跡として報告する。

遺構の時期は、土器集中は擦文文化期後期、獣骨集中・杭列跡・杭跡は明確な帰属時期は不明であるが、遺構の検出状態から中世アイヌ文化期に帰属すると考えられる。

Ⅲ層から出土した遺物は土器 270 点、礫 18 点の合計 288 点である。（宮塚）



図Ⅱ-1　Ⅲ層遺構配置図

表Ⅱ-1　Ⅲ層遺構群一覧表

遺構名	帰属時期	規模(cm)		平面形	グリッド	検出確認層位	被熱の有無	付属遺構	関連遺構	備　考
		長軸	短軸							
ⅢBB-01D	中世アイヌ文化期	140	120	不整形	AK・AL-20・21	ⅢbU・M	-	-	ⅢH-01	
ⅢBB-01E	中世アイヌ文化期	66	28	楕円形	AK-20	ⅢbU・M	-	-	ⅢH-01	
ⅢBB-01F	中世アイヌ文化期	55	35	楕円形	AK-20	ⅢbU・M	-	-	ⅢH-01	
ⅢBB-01G	中世アイヌ文化期	47	32	楕円形	AL-20	ⅢbU・M	-	-	ⅢH-01	
ⅢBB-01H	中世アイヌ文化期	83	52	不整形	AL-20	ⅢbU・M	-	-	ⅢH-01	
ⅢBB-01I	中世アイヌ文化期	145	60	不整形	AL-20	ⅢbU・M	-	-	ⅢH-01	
ⅢBB-01J	中世アイヌ文化期	112	77	不整形	AL-21	ⅢbU・M	-	-	ⅢH-01	
ⅢPB-05	擦文文化期	146	114	不整形	R-18	ⅢbM・L	-	-	-	
ⅢPB-06	擦文文化期	84	84	不整形	R-18	ⅢbM・L	-	-	-	

遺構名	帰属時期	規模(cm)			傾き(度)	グリッド	検出確認層位	タイプ	付属遺構	関連遺構	備　考
		上端	下端	深さ							
杭列跡04											
ⅢKP-462	中世アイヌ文化期	3	0	7	0°	AL-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-463	中世アイヌ文化期	8	0	17	11°	AL-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-464	中世アイヌ文化期	4	1	14	0°	AL-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-465	中世アイヌ文化期	4	1	11	0°	AL-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-466	中世アイヌ文化期	8	1	11	6°	AL-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-469	中世アイヌ文化期	4	1	9	0°	AL-20	Ⅲc	打ち込み	-	-	
ⅢKP-470	中世アイヌ文化期	4	1	12	6°	AL-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-471	中世アイヌ文化期	5	1	7	8°	AK-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-472	中世アイヌ文化期	8	0	15	8°	AK-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-473	中世アイヌ文化期	5	0	13	0°	AK-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-474	中世アイヌ文化期	4	1	20	0°	AK-20	Ⅲc	打ち込み	-	-	
ⅢKP-476	中世アイヌ文化期	5	2	7	10°	AK-20	Ⅲc	打ち込み	-	-	
ⅢKP-477	中世アイヌ文化期	4	0	10	12°	AK-20	Ⅲc	打ち込み	-	-	
ⅢKP-478	中世アイヌ文化期	4	0	9	11°	AK-20	Ⅲc	打ち込み	-	-	
ⅢKP-480	中世アイヌ文化期	6	1	17	5°	AK-20	Ⅲc	打ち込み	-	-	
杭　跡											
ⅢKP-456	中世アイヌ文化期	15	2	57	1°	AK-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-458	中世アイヌ文化期	18	0	49	4°	AL-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-481	中世アイヌ文化期	9	0	49	3°	AK-20	Ⅲc	打ち込み	-	-	
ⅢKP-482	中世アイヌ文化期	18	2	47	3°	AK-20	Ⅳ	打ち込み	-	-	
ⅢKP-483	中世アイヌ文化期	18	3	63	5°	AL-20	Ⅲc	打ち込み	-	-	

第1節　住居跡付属遺構

平成26年度はⅢH-01の東側に獣骨集中ⅢBB-01A～Cを検出し、関連ある遺構として一括して報告した（町教委2016）が、東側の電柱設置範囲を残していた。平成28年度にこの範囲を発掘調査したところ、獣骨集中と杭跡を確認した。ⅢH-01に関連する遺構と考え、遺構の位置関係を図Ⅱ-1に示す。

1. 獣骨集中

C区のTa-bテフラ除去時に獣骨がややまとまった状態で出土した。検出層位を確認するために、2.5mの間隔で土層観察用のベルトを残し、C区全体を注意深く精査したが、獣骨が出土した範囲は電柱撹乱孔より西側に限られ、東側からは検出していない。獣骨は小ブロックに分かれて検出されたため、枝記D～Jを追記した。調査は竹べら、竹串を用いながら検出・精査作業を行った後、酢酸ビニル系樹脂（水溶性ボンド）を希釈したものを2～3回塗布した。獣骨番号を付番しながら、形状が明瞭で遺存状態の良好なものは図化し、不良なものは位置情報のみ記録した。並行して個体ごとの記録写真を撮影した。取り上げ後、室内にてクリーニング作業および再度樹脂による補強を行い、形状の保持に努めた。以下に各ブロックの詳細を示す。

ⅢBB-01D（図Ⅱ-2　図版1-4）

位　置：AK・AL-20・21区　　主体検出層位：ⅢbU・M

規　模：140×120cm　　主体動物／部位：哺乳網／不明

確認・調査　杭列跡の中央部から西に1.8～2.8m離れた位置で集中した細片を検出した。極力図化に努めたが、1cm以下の小片は位置のみ記録した。獣骨集中を構成する遺存体は全て焼骨片で、細片のため部位を特定することは不可能であった。

ⅢBB-01E（図Ⅱ-2　図版1-5）

位　置：AK-20区　　主体検出層位：ⅢbU・M

規　模：66×28cm　　主体動物／部位：シカ／上腕骨・距骨など

確認・調査　平成28年度に調査した獣骨集中の中では北端に位置し、平成26年度調査のⅢBB-04とは分布範囲周縁から約2.1m離れた位置にある。同様に、前述したⅢBB-01Dとは約1.4m、後述するⅢBB-01Fとは約1.1mの距離に位置するためⅢBB-01の一群に含めた。北側に撹乱孔があり、この範囲にも広がっていたことも想定される。遺存体は全て未被熱である。

ⅢBB-01F（図Ⅱ-2　図版1-6）

位　置：AK-20区　　主体検出層位：ⅢbU・M

規　模：55×35cm　　主体動物／部位：シカ／遊離歯

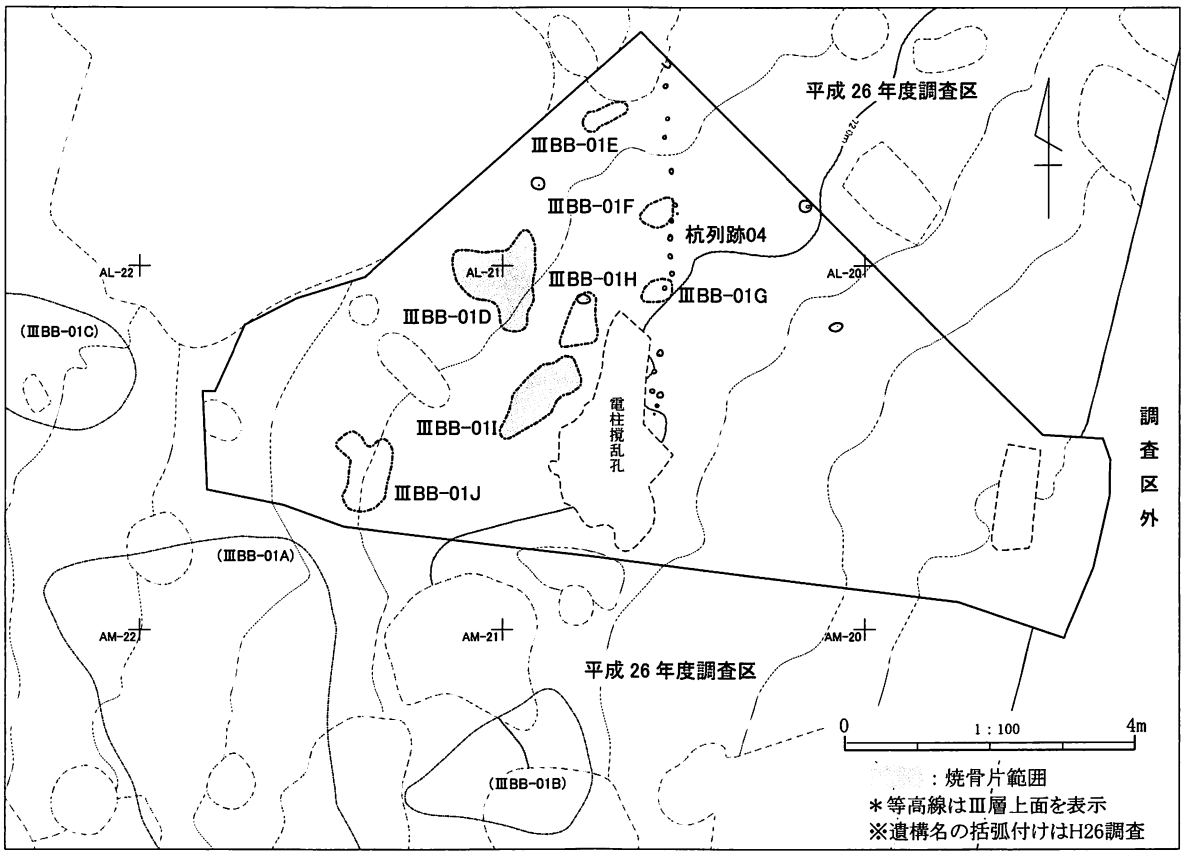
確認・調査　後述するG同様、杭列跡に沿って微細な獣骨片が集中して出土した小ブロックである。形状がわかるものは出土していない。範囲のみを記録して、周辺の土壌と一緒に取り上げた。全て未被熱である。

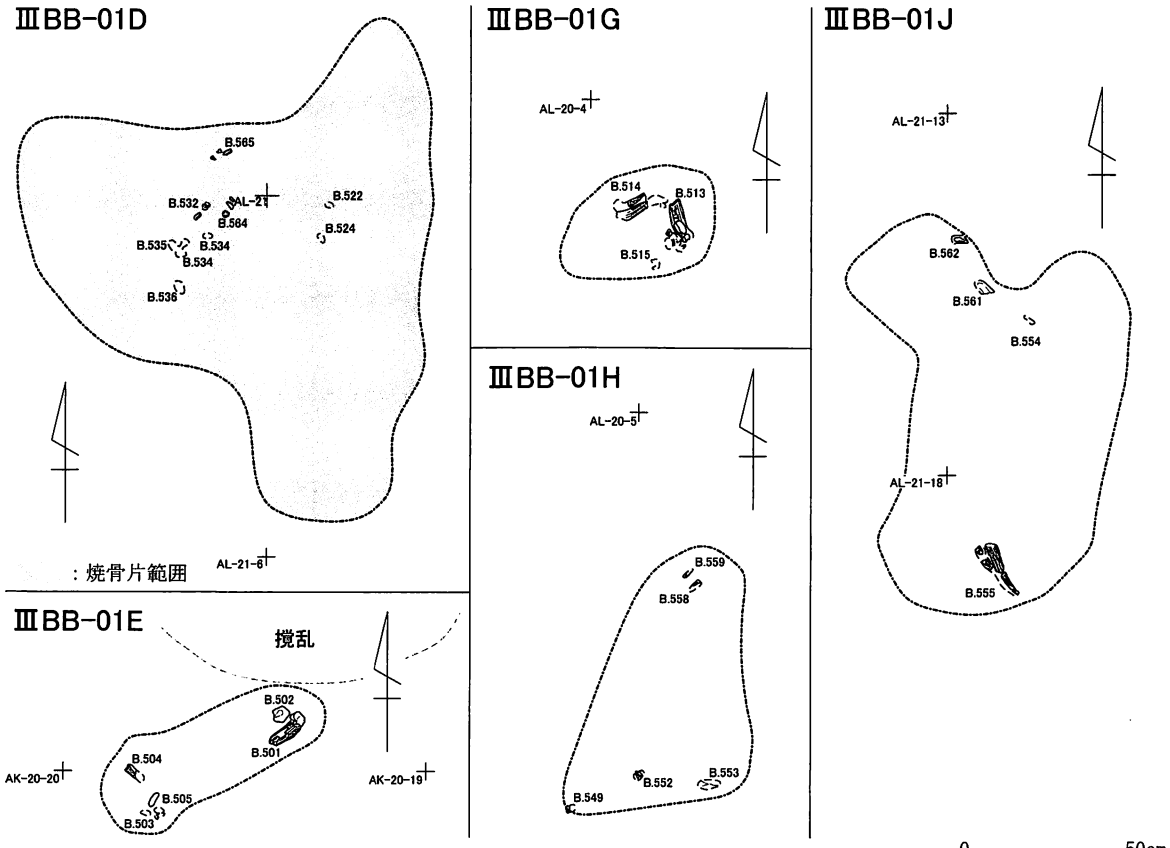
ⅢBB-01G（図Ⅱ-2　図版1-7）

位　置：AL-20区　　主体検出層位：ⅢbU・M

規　模：47×32cm　　主体動物／部位：シカ／遊離歯・上腕骨・橈骨など

確認・調査　ⅢBB-01F同様、杭列跡に接近して検出した。上腕骨は遠位端と近位端であり、同一個体のものと思われる。全て未被熱である。


平成 26 年度調査区
ⅢBB-01E
ⅢBB-01F
杭列跡04
ⅢBB-01H
ⅢBB-01G
ⅢBB-01D
ⅢBB-01I
ⅢBB-01J
電柱撹乱孔
(ⅢBB-01C)
(ⅢBB-01A)
(ⅢBB-01B)
AL-22
AL-21
AL-20
AM-22
AM-21
AM-20
調査区外
0
1：100
4m
：焼骨片範囲
＊等高線はⅢ層上面を表示
※遺構名の括弧付けはH26調査


ⅢBB-01D
B.565
B.532
AL-21
B.522
B.564
B.524
B.535
B.534
B.534
B.536
：焼骨片範囲
AL-21-6
ⅢBB-01G
AL-20-4
B.514
B.513
B.515
ⅢBB-01J
AL-21-13
B.562
B.561
B.554
AL-21-18
B.555
ⅢBB-01H
AL-20-5
B.559
B.558
B.552
B.553
B.549
ⅢBB-01E
撹乱
B.502
B.501
B.504
B.505
B.503
AK-20-20
AK-20-19
※F・Iブロックは微細図なし
0
1：20
50cm

図Ⅱ-2　ⅢBB平面図

ⅢBB-01H（図Ⅱ-2　図版1-8）

位　置：AL-20区　　主体検出層位：ⅢbU・M

規　模：83×52 cm　　主体動物／部位：シカ／遊離歯など

確認・調査　ⅢBB-01DとGの間やや南から検出された。北と南に分かれて出土している様相が見られるが、ほとんどが遊離歯で全て未被熱であるので一括した。

ⅢBB-01I（図Ⅱ-2　図版2-1）

位　置：AL-20区　　主体検出層位：ⅢbU・M

規　模：145×60 cm　　主体動物／部位：哺乳網／不明

確認・調査　杭列跡04南端西側1～2mの位置に焼骨片の集中を検出した。形状を確認できるものはなく、位置と範囲を記録して周囲の土ごと取り上げた。

ⅢBB-01J（図Ⅱ-2　図版2-2）

位　置：AL-21区　　主体検出層位：ⅢbU・M

規　模：112×77 cm　　主体動物／部位：シカ／四肢骨など

確認・調査　杭列跡の南端から南西に3.5～4.0mの地点に未被熱獣骨が集中する範囲を確認した。平成26年度に調査したⅢBB-01Aとは約1m離れた位置にある。このブロックの南端からは、四肢骨の割れた骨幹部分が出土している。獣骨片はこの杭列跡から東側には1点も検出されていない。

獣骨集中ごとのブロック構成は、ⅢBB-01FとHブロックがほとんど遊離歯で、距離も1.2mと比較的近接している。出土量はHブロックがハンドピックとして取り上げ、同定できるものが極僅かであった。

ⅢBB-01E・G・JブロックはGブロックに上顎歯が含まれるが、ほとんどが四肢骨と不明の獣骨である。不明部位については、四肢骨主体のブロックと思われる。これらはいずれも未被熱で同一層位から出土するため関連あるものと思われる。

ⅢBB-01DとIブロックはすべて焼骨片の細片であり詳細についてはは不明である。

今年度の本遺構調査では、平成26年度のⅢH-01とⅢBB-01A～Cとの位置関係から関連性が示唆されるが、ブロックごとの内容物や出土量に特徴的な傾向は認められず、検出層位と出土位置からの推察にとどまる。

2. 杭列跡・杭跡（図Ⅱ-3　図版2-3～9・3・4-1～13）

確認・調査　獣骨集中ⅢBB-01D～Jを精査中にⅢc層で締まりのない黒色土Ⅲb層の円形プランを確認した。他にも杭跡の存在が考えられるため獣骨集中の調査終了後、Ⅲc層からⅣ層まで掘り下げ、全体の確認を行った。杭跡の番号は平成26年度から継続して行い、検出写真、平面の記録後、半截し断面の記録と写真撮影を行った。全て打ち込み杭である。ⅢKP-480を北端とし、ⅢKP-462を南端とする15本の杭跡はほぼ一列に並び、深さも20cm未満と浅いが、ⅢKP-456・458・481・482・483は47～63cmの深さを持ち、規模が大きいため前者とは異なる。このことから前者を杭列跡、後者を杭跡として以下に記述する。

杭列跡04（図Ⅱ-3　図版2-3～9 3 4-1～3）

位　置：AL・AK-20区　　規　模：445×30 cm　　検出層位：Ⅲc～Ⅳ

本　数：15本　　長軸方向：N-3° E

15 本の杭跡の断面を観察すると、覆土が 1 層（黒色土に Ta-c 層を微量含む）のみと、Ta-c 層を少量含む 2･3 層（黒褐色･暗褐色土）の 2 種類に分けられる。ⅢKP-463 は上位が 1 層で、下位に 2 層が見られ、ほかの杭跡に比べ、やや太い。重複していることも考えられる。覆土が 1 層のみの杭跡の配列は北からⅢKP-480･474･473･472･470･466･465･462 で長さは 435cm、ただし、北からⅢKP-480 と 474 の間は約 1.5m、ⅢKP-470 と 466 の間は約 1m と離れている。覆土が 2･3 層の杭跡の配列は北からⅢKP-478･477･476･471･469･464･463 で長さは 385cm である。同様に北からⅢKP-476 と 471 の間は約 1.1m、ⅢKP-469 と 463･464 の間は約 1.4m 離れている。後者のⅢKP-476 と 471 の間に覆土 1 層のⅢKP-472～474 が位置し、列をなしているので、覆土の違いによって時期差を表すと即断はできないが、覆土から 2 時期にわたって杭列が作られた可能性も考えられる。

平成 26 年度の調査では延長線上にⅢBB-04 が広がり、杭列跡の続きは認められていない。

住居跡（ⅢH-01）の方位、住居跡と獣骨集中との位置関係等を考えると、杭列跡は「シカの送り場」に併設された「幣場」的な機能を想起させる。

杭跡（図Ⅱ-3　図版 4-4～13）

平成 28 年度の調査では上記の杭列跡以外に、同じ C 区で 5 基の杭跡を検出した。上端は径 9～18cm で、深さは 47～63cm と杭列跡に比べて規模が大きい。5 基のうち 1 基（ⅢKP-481）は調査区の北側境界付近で検出しており、他の 4 基に比べ幅が細く規格が異なる。

これ以外の 4 基はⅢKP-456 と 458、ⅢKP-482 と 483 の間隔がそれぞれ約 170cm であるが、規格的な配列は認められない。

平成 26 年度に調査を行った本遺構に隣接する地点からも、同様の杭跡が検出されていないことから、建物跡とは考えられず、単独の杭跡とした。

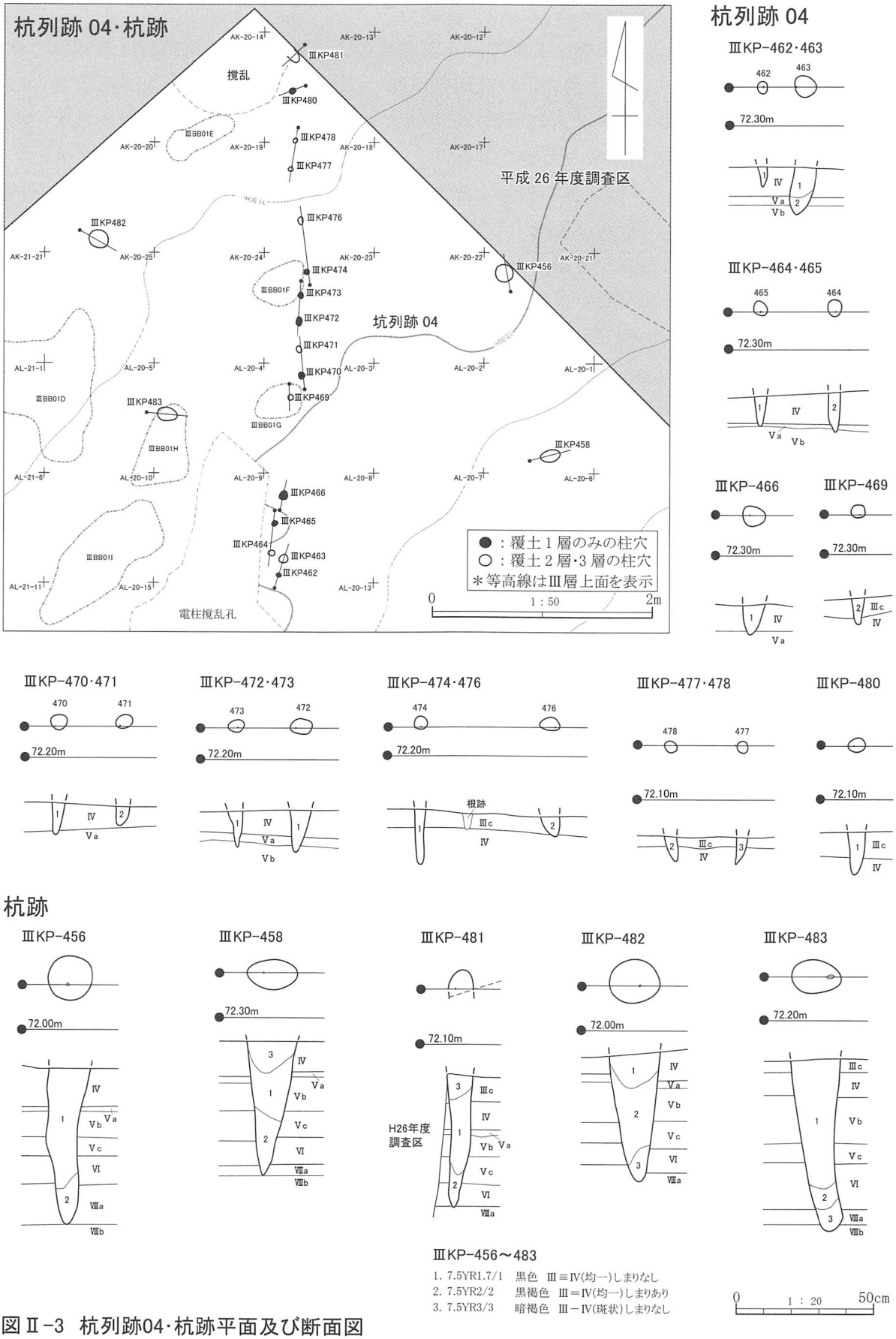
時期　杭列跡･杭跡ともに覆土はⅢ層黒色腐植土を主体としており、周辺出土遺物の検出層位から擦文～中世アイヌ文化期に帰属すると思われる。（宮塚）

表Ⅱ-2　ⅢBB-01ハンドピック法動物遺存体同定一覧表

〔ⅢH-01関連遺構／中世アイヌ文化期〕

遺構	層位	骨番号	出土動物	出土骨・部位	状態	備考
ⅢBB-01D	ⅢbU・M	517	哺乳網	不明	被熱	
		518	哺乳網	不明	被熱	
		519	哺乳網	不明	被熱	
		520	哺乳網	不明	被熱	
		521	哺乳網	不明	被熱	
		522	哺乳網	不明	被熱	
		523	哺乳網	不明	被熱	
		524	哺乳網	不明	被熱	
		525	哺乳網	不明	被熱	
		526	哺乳網	不明	被熱	
		527	哺乳網	不明	被熱	
		528	哺乳網	不明	被熱	
		529	哺乳網	不明	被熱	
		530	哺乳網	不明	被熱	
		531	哺乳網	不明	被熱	
		532	哺乳網	不明	被熱	
		533	哺乳網	不明	被熱	
		534	哺乳網	不明	被熱	
		535	哺乳網	不明	被熱	
		536	哺乳網	不明	被熱	
		537	哺乳網	不明	被熱	
		538	哺乳網	不明	被熱	
		539	哺乳網	不明	被熱	
		540	哺乳網	不明	被熱	
		541	哺乳網	不明	被熱	
		564	哺乳網	不明	被熱	
		565	哺乳網	不明	被熱	
		566	哺乳網	不明	被熱	
		567	哺乳網	不明	被熱	
		568	哺乳網	不明	被熱	
		569	哺乳網	不明	被熱	
ⅢBB-01E	ⅢbM	501	シカ	上腕骨・遠位端	未被熱	
		502	シカ	距骨	未被熱	
	ⅢbU	503	哺乳網	不明	未被熱	
		504	哺乳網	不明	未被熱	
		505	哺乳網	不明	未被熱	

遺構	層位	骨番号	出土動物	出土骨・部位	状態	備考
ⅢBB-01F	ⅢbU・M	506	シカ	遊離歯	未被熱	
		507	シカ	遊離歯	未被熱	
		508	シカ	遊離歯	未被熱	
		509	シカ	遊離歯	未被熱	
		511	シカ	遊離歯	未被熱	
		512	シカ	遊離歯	未被熱	
ⅢBB-01G	ⅢbU・M	510	シカ	遊離歯(上)	未被熱	
		513	シカ	上腕骨・近位端	未被熱	
		514-1	シカ	上腕骨・遠位端	未被熱	
		514-2		橈骨・遠位端	未被熱	
		515	哺乳網	不明	未被熱	
		516	哺乳網	不明	未被熱	
ⅢBB-01H	ⅢbU・M	549	シカ	遊離歯	未被熱	
		551	シカ	遊離歯	未被熱	
		552	シカ	遊離歯	未被熱	
		553	哺乳網	不明	未被熱	
ⅢBB-01I	ⅢbU・M	542	哺乳網	不明	被熱	
		543	哺乳網	不明	被熱	
		544	哺乳網	不明	被熱	
		545	哺乳網	不明	被熱	
		546	哺乳網	不明	被熱	
		547	哺乳網	不明	被熱	
		548	哺乳網	不明	被熱	
		550	哺乳網	不明	被熱	
ⅢBB-01J	ⅢbU・M	554	哺乳網	不明	未被熱	
		555	シカ	四肢骨・骨幹	未被熱	
		557	哺乳網	不明	未被熱	
		558	哺乳網	不明	未被熱	
		559	哺乳網	不明	未被熱	
		560	哺乳網	不明	未被熱	
		561	シカ	四肢骨	未被熱	
		562	哺乳網	不明	未被熱	
		563	哺乳網	不明	未被熱	



図Ⅱ-3　杭列跡04・杭跡平面及び断面図

第2節　土器集中

平成28年度に調査したA区は調査区北部の段丘西側縁辺に位置し、段丘崖斜面は急傾斜の堆積層流出によりⅢ層は10～15cmと薄い。段丘面平坦面ではTa-b層を除去し、Ⅲb層調査中に土器集中2ヵ所を検出した。それぞれに平成26年度からの通し番号を付した。遺物はすべてⅦ群B3類に属する擦文文化期後期の土器である。

なお、平成26年度の調査ではA区の南側で擦文後期前半のⅢPB-04、ⅢSB-04、ⅢF-28を検出しており、これらとほぼ同時期か後続する時期と思われ、今回検出の土器集中は段丘縁辺部における一連の遺構群の北端部となる。また、周辺は耕作造成により樽前dテフラまで削平され詳細は不明であったが、本年度の調査により段丘縁辺部に限らず平坦面まで当該期の活動領域が広がっていた可能性も示唆できた。

ⅢPB-05（図Ⅱ-4　図版4-14･5-1）

位　置：R-18区　　検出層位：ⅢbM･L

規　模：146×114㎝

調査・確認　Ⅲb層中位から下位にかけて土器片が広範囲に散逸した状態で出土し、1個体の土器片（図Ⅱ-5-1～3）がややまとまる範囲をⅢPB-05とした。周辺部の遺物も含めて全体を精査し、出土状態の写真撮影後、微細図を作成した後に位置情報を記録し取り上げた。

出土遺物（図Ⅱ-5-1～3　図版6-1～3）　1～3は甕形土器の同一個体片で、1･2は縦位沈線文を施す口縁部片。2の破片では胴部上半の文様帯に矢羽根状構成の沈線文が施されている。内面は黒色処理がなされ、横方向のミガキ調整である。3は胴部下半の破片資料で、器表面は斜位のミガキ調整である。内面には炭化物が付着している。

ⅢPB-06（図Ⅱ-4　図版4-14･5-2）

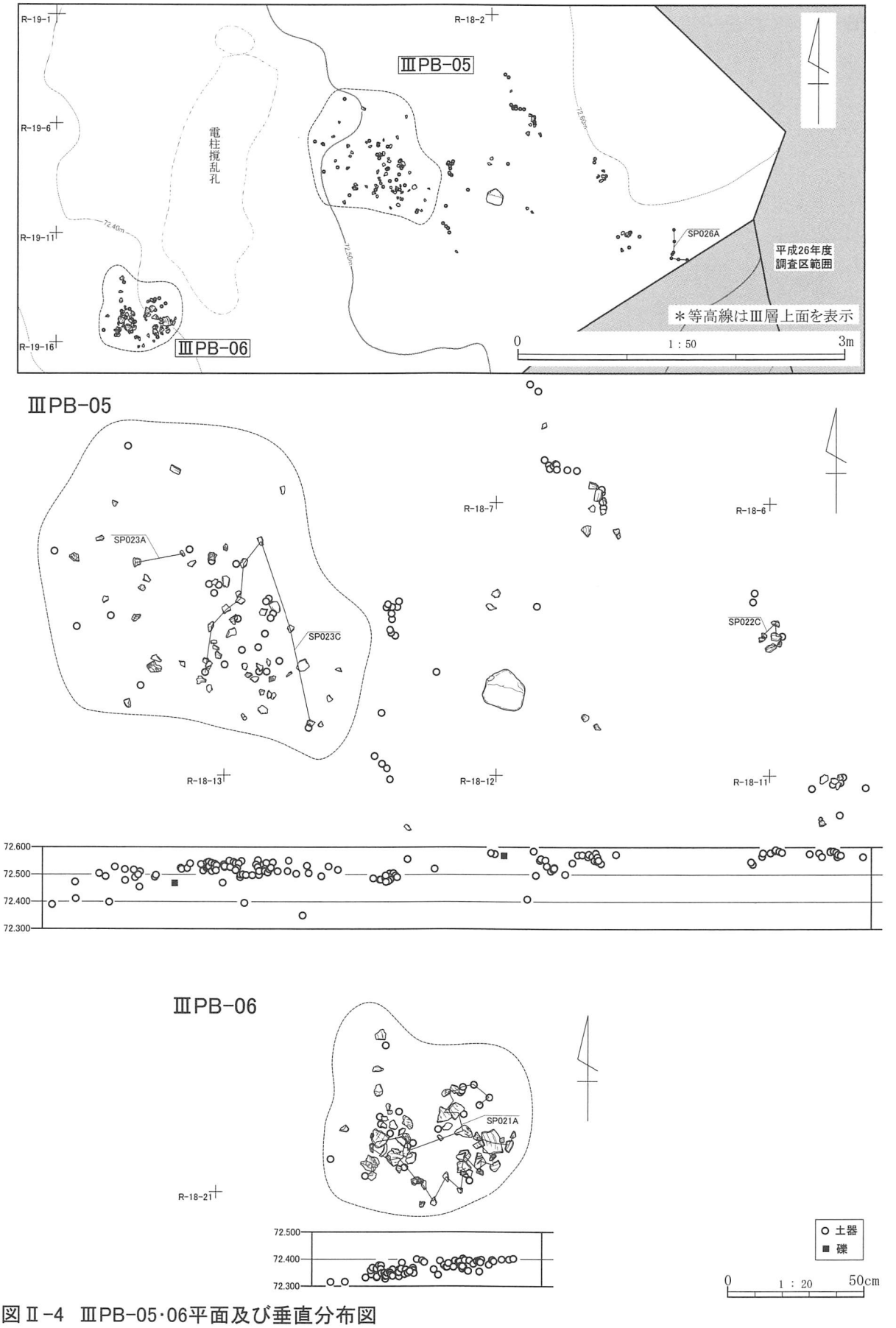
位　置：R-18区　　検出層位：ⅢbM･L

規　模：84×84㎝

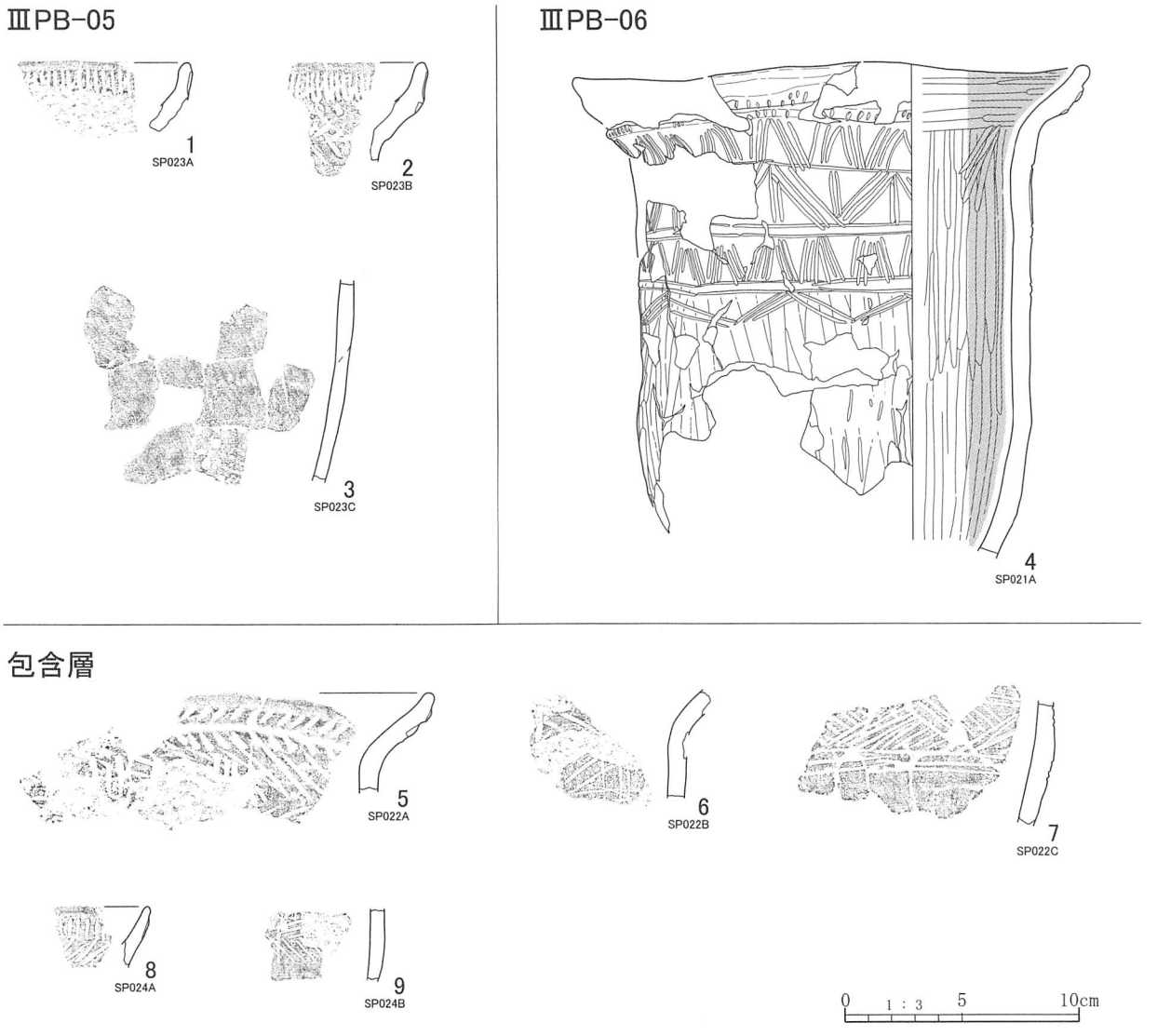
調査・確認　ⅢPB-05から約1.5m南西の平坦面でⅢb層の調査時に検出した。本集中は現代の切株の下に残存しており、当初、根を残して調査を進めたが、写真撮影等に支障をきたすため切株を除去し、精査した結果、密集度合の高い土器片の集中と礫が出土した。細かな根を取り除きながら精査し、出土状態の写真撮影後、微細図を作成した後に位置情報を記録し取り上げた。

出土遺物（図Ⅱ-5-4　図版6-4）　4は底部を欠く甕形土器。口縁に2段の刻みを付け、胴部上半から横走沈線で区画した中に、3段の文様帯を持つ。横走沈線最上位は1条であるが、他の区画帯は2条1対で巡る。文様帯には3条1対の鋭角な鋸歯状沈線文が充填される。胴部上半の文様帯下縁には2条1対の鈍角な鋸歯状文が施文される。器表面の調整は文様帯部分がナデ調整で、胴部下半は縦方向の粗雑なミガキ調整、図示範囲外ではあるが胴部下半の底部付近では斜位方向のやや入念なミガキ調整が施されている。器内面は口縁から胴部上半にかけては横方向、胴部下半以下は縦方向の入念なミガキ調整が施され平滑であるものの、器厚はやや厚く成形時の粘土帯（約50mm）の痕跡が残っている。施文状況も含め、全体的に粗雑な土器である。

（宮塚）



図Ⅱ-4　ⅢPB-05･06平面及び垂直分布図



図Ⅱ-5 遺構·包含層出土土器

第3節 包含層出土遺物

土器(図Ⅱ-5-5～9 図版6-5～9) 図示した遺物はすべてA区から出土した。5～7と8·9がそれぞれ同一個体片で、土器集中の個体と合わせて合計4個体が出土している。5～7は合計16点が接合した。それぞれの破片でやや風化して、破片ごとに色調が異なっており埋没過程に差異があるものと思われる。5は頸部が屈曲して開く口縁部片で、6はその屈曲部位である。口縁部には矢羽根状構成に刻みを施し、胴部上半の文様帯には横位の矢羽根状沈線文が施文されている。内面は横方向のミガキが施される。7は胴部上半の文様帯下縁の部位で、3条1対の平行沈線文による区画帯を施した複段の文様帯となる。文様構成は斜位沈線文によって山形をなす。内面は上半の一部は斜め方向のミガキ、下半部は縦方向のミガキ調整が施される。同一個体片の8·9は、口縁部にはやや間隔が開いた縦位沈線文の下位に斜位沈線文が施される。9の胴部上半の文様帯区画帯下縁の破片資料で、横位の矢羽根状沈線文が施されている。内面は口縁部が横位、胴部は縦位の入念なミガキ調整で、黒色処理がなされている。 (宮塚)

表Ⅱ-3　Ⅲ層遺構・包含層出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	調査区遺構名	層位	点数	部位	器面調整		文様	備考
								器表面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	口縁部等/文様帯	
Ⅱ-5-1	6-1	SP023A	ⅦB3	ⅢPB-05	ⅢbL	2	口縁	横ナデ	横ミガキ(黒)	縦位沈線文	
Ⅱ-5-2	6-2	SP023B	ⅦB3	R-18	KR	3	口縁	横ナデ	横ミガキ(黒)	縦位沈線文/刺突文・矢羽根状沈線文(短)	
Ⅱ-5-3	6-3	SP023C	ⅦB3	ⅢPB-05	ⅢbL	8	胴	斜めミガキ	縦ミガキ(黒)	―	
Ⅱ-5-4	6-4	SP021A	ⅦB3	ⅢPB-06	ⅢbL	36	口縁～胴下半	横ナデ/横ナデ・縦ミガキ	横ミガキ/縦ミガキ	刻み(2段)/斜位沈線文(鋸歯状・鋭角・3条1対3段)・縦位沈線文・横走沈線文(3段)・斜位沈線文(鋸歯状・鈍角・2条1対)	
Ⅱ-5-5	6-5	SP022A	ⅦB3	R-17	KR ⅢbM ⅢbL	1 3 3	口縁～胴上半	横ナデ/横ナデ	横ミガキ	矢羽根状刻み・横走沈線文/矢羽根状沈線文・縦位沈線文	風化
Ⅱ-5-6	6-6	SP022B	ⅦB3	R-17	ⅢbL	2	胴上半	横ナデ	上半・横ミガキ 下半・縦ミガキ	斜位・縦位・横位沈線文	風化
Ⅱ-5-7	6-7	SP022C	ⅦB3	R-17	ⅢbL	7	胴	上半・横ナデ 下半・縦ミガキ	上半・斜めミガキ(一部) 下半・縦ミガキ	横位・斜位沈線文・横走沈線文	風化
Ⅱ-5-8	6-8	SP024A	ⅦB3	R-18	ⅢbL	1	口縁	横ナデ	横ミガキ(黒)	縦位沈線文・斜位沈線文	
Ⅱ-5-9	6-9	SP024B	ⅦB3	R-18	ⅢbL	1	胴	横ナデ	上半・横ナデ 下半・縦ミガキ	矢羽根状沈線文(短)	

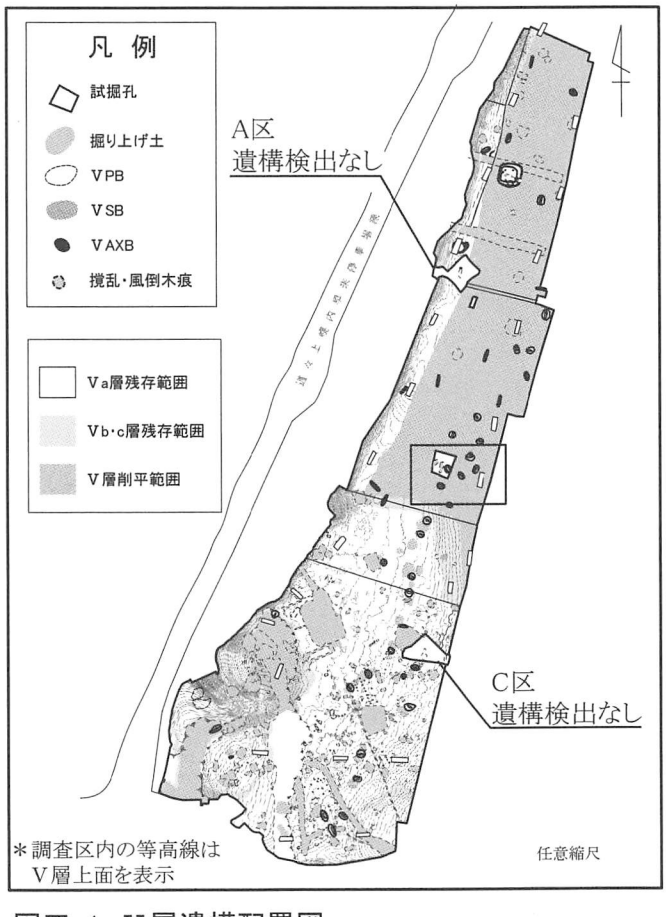
第Ⅲ章　Ⅴ層の調査

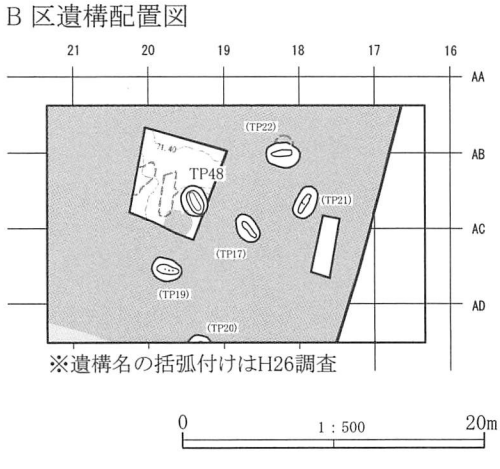
平成 28 年度に調査した上幌内１遺跡のⅤ層からは、B 区でＴピット１基のみが検出され、出土遺物はフレイク・チップ類２点・礫 12 点である。A 区・C 区からは遺構・遺物は検出されなかった。（宮塚）

第１節　Ｔピット

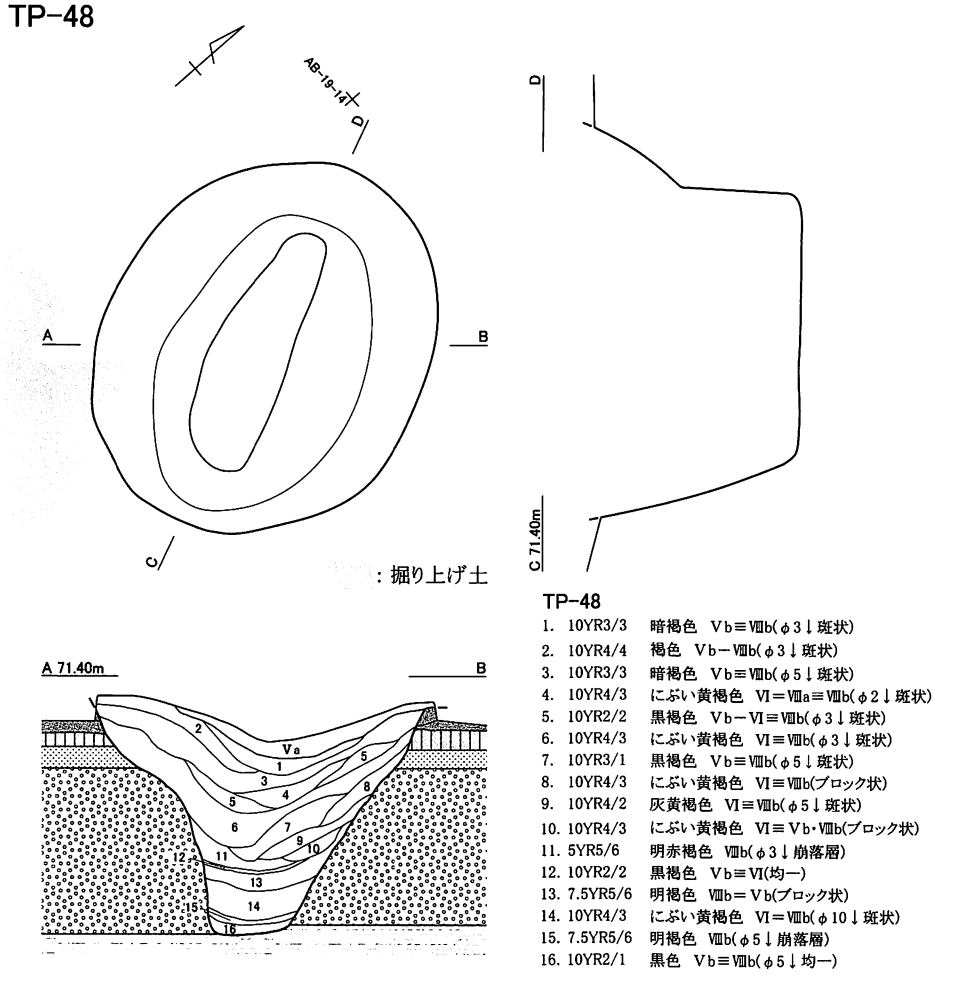
TP-48（図Ⅲ-2　図版 5-4～6）

B 区のⅣ層火山灰除去時にⅤb 層上位で楕円形状の窪みと掘り上げ土を検出した。Ｔピットと想定されたので、掘り上げ土の範囲を記録後、断面観察用のベルトを残し、窪みは半截して掘り下げた。上端の平面形は円形に近い楕円形、坑底面は楕円形を呈する。杭穴は検出できなかった。底面の長短比は 1：3 で、『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』（苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1987）の分類基準に従えば C1 型に属する。Ｔピットの覆土上半には Ta-d2 を少量含む黒色土が堆積しているが、掘り上げ土の流れ込みは顕著に見られない。下半には壁面から崩落したⅧb 層を主体とする土壌が厚く堆積しているが、途中に黒褐色土（12）層を挟み、覆土が堆積する時間差を考えさせる。（宮塚）





図Ⅲ-1　Ⅴ層遺構配置図



図Ⅲ-2　TP-48平面及び断面図

表Ⅲ-1　縄文時代遺構属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	分類	グリッド	平面形 調査面/坑底面	調査面層位	調査面規模(cm) 長軸	調査面規模(cm) 短軸	坑底面規模(cm) 長軸	坑底面規模(cm) 短軸	深さ(cm)	長軸方向	杭跡	調査面長短比	坑底面長短比
Ⅲ-2	5-4～6	TP-48	C1	AB-19	楕円形/楕円形	VbM	206	170	132	44	124	N-26° E	－	1.21	3.00

引用・参考文献

厚真町　1986　『厚真町史』

厚真町教育委員会　2001a　『豊川１遺跡』

厚真町教育委員会　2001b　『鯉沼２遺跡』

厚真町教育委員会　2004　『厚幌１遺跡』

厚真町教育委員会　2005　『鯉沼３遺跡』

厚真町教育委員会　2006a　『上幌内モイ遺跡(1)』

厚真町教育委員会　2006b　『鯉沼３遺跡(2)』

厚真町教育委員会　2007a　『上幌内モイ遺跡(2)』

厚真町教育委員会　2007b　『鯉沼３遺跡(3)』

厚真町教育委員会　2009a　『上幌内モイ遺跡(3)』

厚真町教育委員会　2009b　『ニタップナイ遺跡(1)』

厚真町教育委員会　2010a　『厚幌１遺跡(2)幌内７遺跡(1)』

厚真町教育委員会　2010b　『幌内５遺跡(1)富里２遺跡
ニタップナイ遺跡(2)』

厚真町教育委員会　2011　『オニキシベ２遺跡』

厚真町教育委員会　2013a　『ヲチャラセナイチャシ跡・
ヲチャラセナイ遺跡』

厚真町教育委員会　2013b　『オニキシベ５遺跡』

厚真町教育委員会　2015a　『ショロマ２遺跡』

厚真町教育委員会　2015b　『ショロマ１遺跡』

厚真町教育委員会　2016　『上幌内１遺跡』

厚真村　1956　『厚真村史』

厚真村郷土研究会　1962　『厚真村古代史』

出穂雅実　2006　「第Ⅲ章第２節　ジオアーケオロジー」
『上幌内モイ遺跡(1)』厚真町教育委員会

乾 哲也　2011「厚真の遺跡を支えたもの」
『アイヌ史を問いなおす』勉誠出版

亀井喜久太郎　1956　「厚真出土の土偶」『先史時代』3

亀井喜久太郎　1976　『厚真の旧地名を尋ねて』

(財)北海道埋蔵文化財センター　2003
『厚真町浜厚真３遺跡』北埋調報 186

早田 勉　2006　「上幌内モイ遺跡後期更新統の層序と
テフラ」『上幌内モイ遺跡(1)』厚真町教育委員会

田近 淳・大津 直・八幡正弘　2004　「厚幌１遺跡の地すべ
り堆積物」『厚幌１遺跡』厚真町教育委員会

苫小牧市埋蔵文化財調査センター　1987
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』

苫小牧市埋蔵文化財調査センター　1990
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』

苫小牧市埋蔵文化財調査センター　1992　『静川 37 遺跡』

苫小牧市埋蔵文化財調査センター　1992
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』

苫小牧市埋蔵文化財調査センター　1995
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』

苫小牧市埋蔵文化財調査センター　2002a
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅷ』

苫小牧市埋蔵文化財調査センター　2002b
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅸ』

野澤謙庵　1692　「蝦夷記」『續々群書類從第九』

町田 洋・新井房夫　2003　『火山灰アトラス』東京大学出版会

松浦武四郎(吉田常吉編)　1962
『蝦夷日誌 上　東蝦夷日誌』時事通信社

松浦武四郎(高倉信一郎校訂)　1985　『戊午東西蝦夷山川
地理取調日誌』中　北海道出版企画センター

松野久也・石田正夫　1960
『1:50,000 地質図幅説明書早来』北海道開発庁

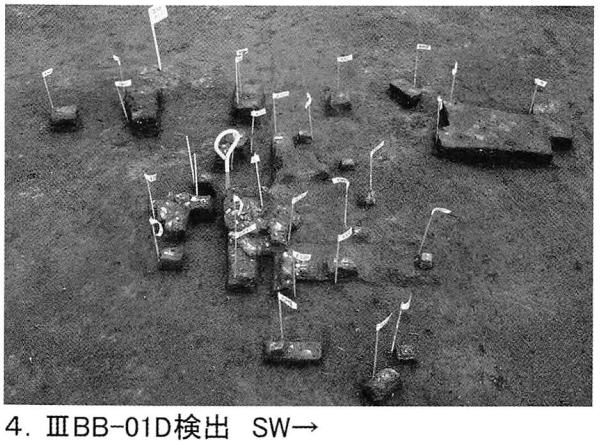
上幌内１遺跡(2)
写真図版

図版1

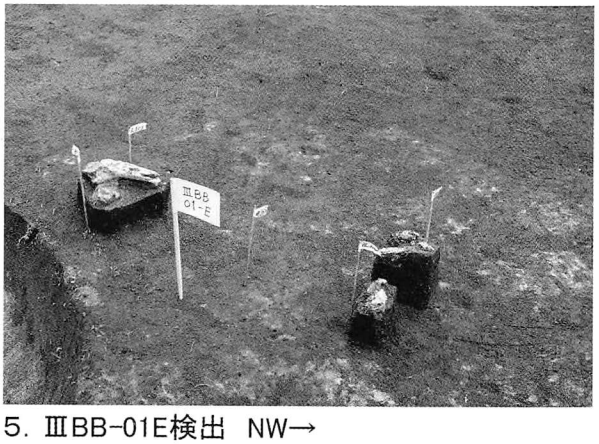
1．A区Ⅲ層検出　S→

2．C区Ⅲ層検出　N→

3．ⅢBB-01検出　N→

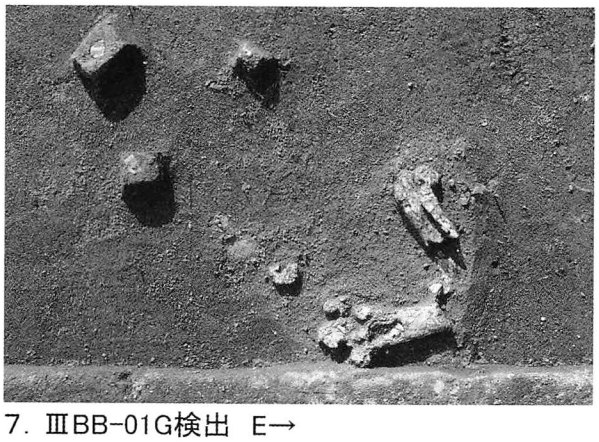


4．ⅢBB-01D検出　SW→



5．ⅢBB-01E検出　NW→

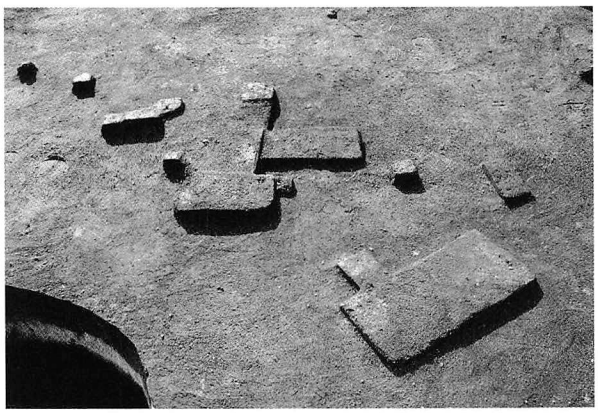
6．ⅢBB-01F検出　W→



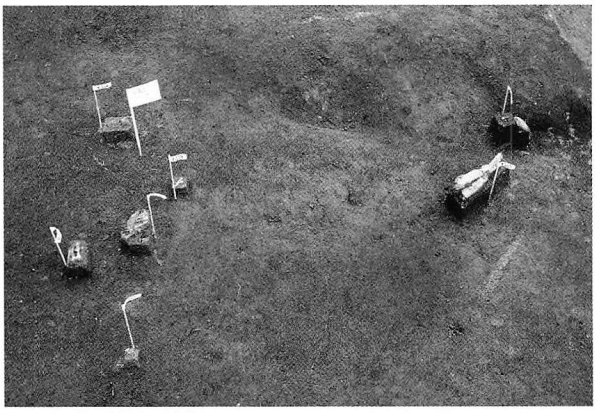
7．ⅢBB-01G検出　E→

8．ⅢBB-01H 検出　E→

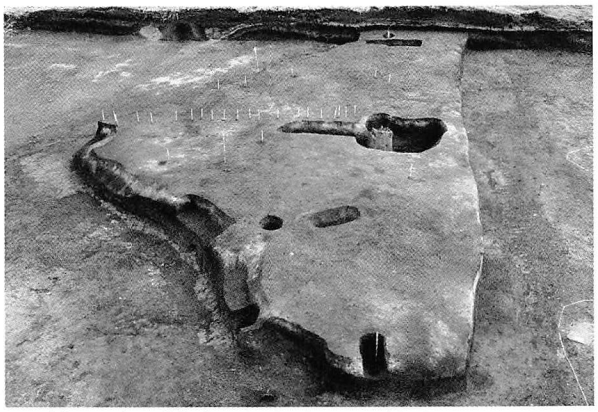
図版2



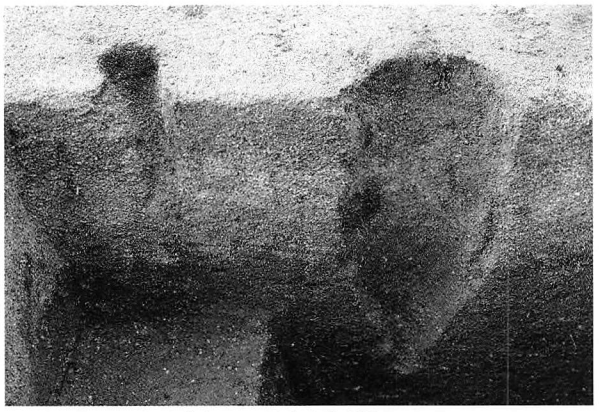
1. ⅢBB-01I検出　E→



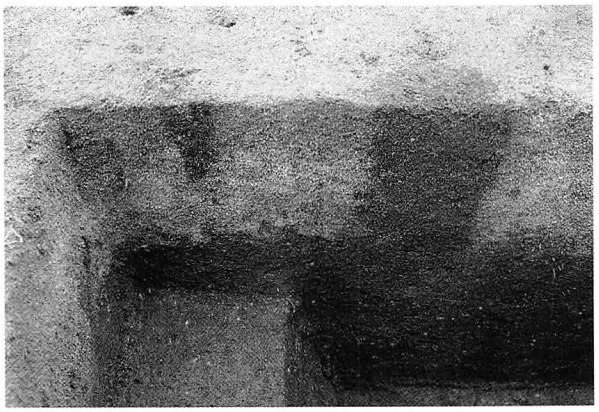
2. ⅢBB-01J検出　W→



3. 杭列跡04検出　W→



4. ⅢKP-462(左)･463(右)完掘　E→



5. ⅢKP-462(左)･463(右)断面　E→

6. ⅢKP-465(左)･464(右)完掘　W→

7. ⅢKP-465(左)･464(右)断面　W→

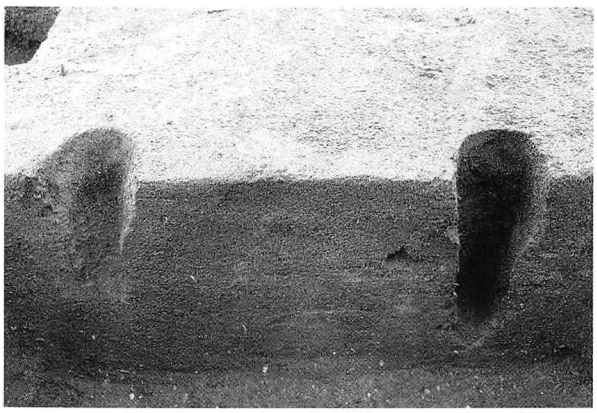
8. ⅢKP-466完掘　E→

9. ⅢKP-466断面　E→

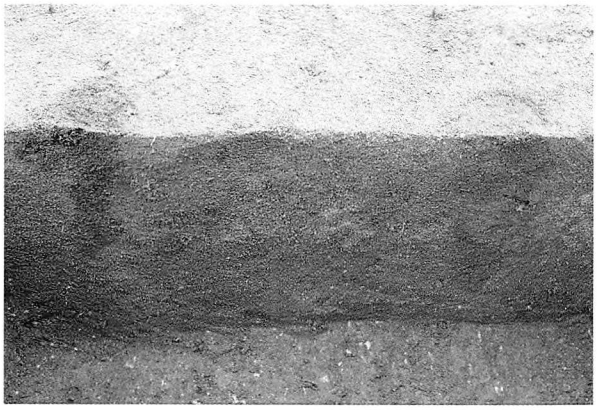
図版3

1. ⅢKP-469完掘　W→

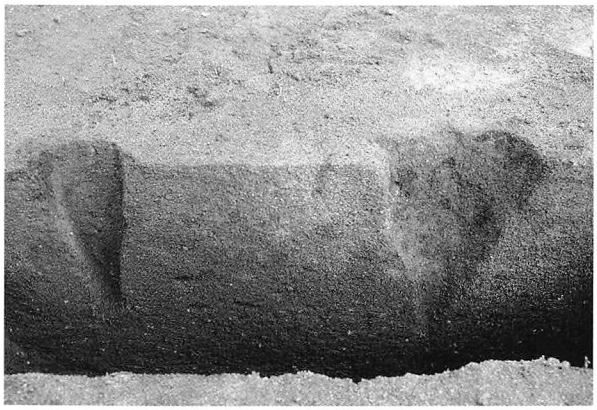
2. ⅢKP-469断面　W→



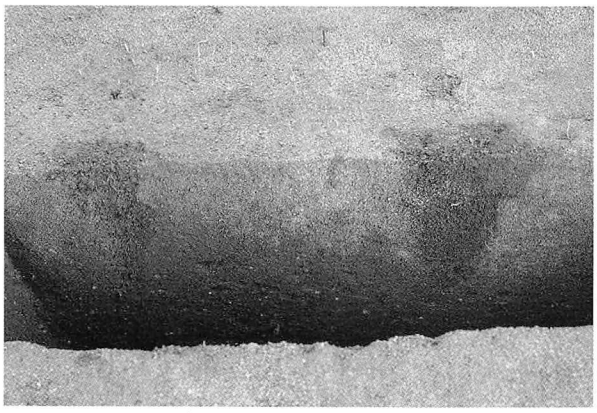
3. ⅢKP-470(左)･471(右)完掘　E→



4. ⅢKP-470(左)･471(右)断面　E→



5. ⅢKP-473(左)･472(右)完掘　W→



6. ⅢKP-473(左)･472(右)断面　W→

7. ⅢKP-474完掘　E→

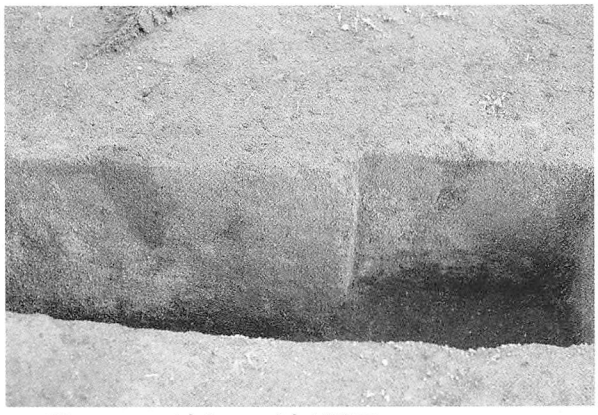
8. ⅢKP-474断面　E→

9. ⅢKP-476完掘　E→

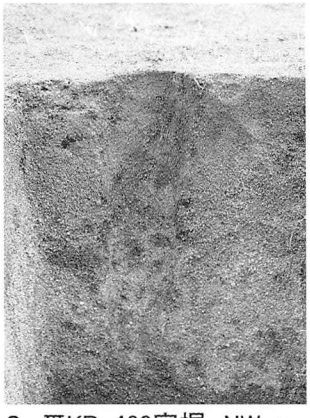
10. ⅢKP-476断面　E→

11. ⅢKP-478(左)･477(右)完掘　W→

図版4



1．ⅢKP-478(左)･477(右)断面　W→



2．ⅢKP-480完掘　NW→

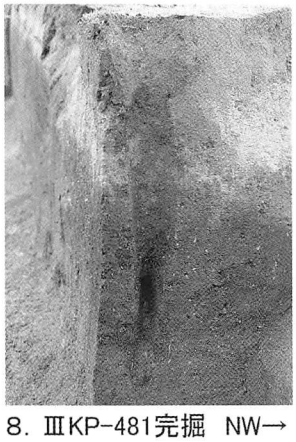
3．ⅢKP-480断面　NW→

4．ⅢKP-456完掘　E→

5．ⅢKP-456断面　E→

6．ⅢKP-458完掘　S→

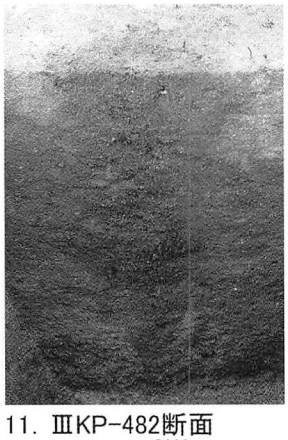
7．ⅢKP-458断面　S→



8．ⅢKP-481完掘　NW→

9．ⅢKP-481断面　NW→

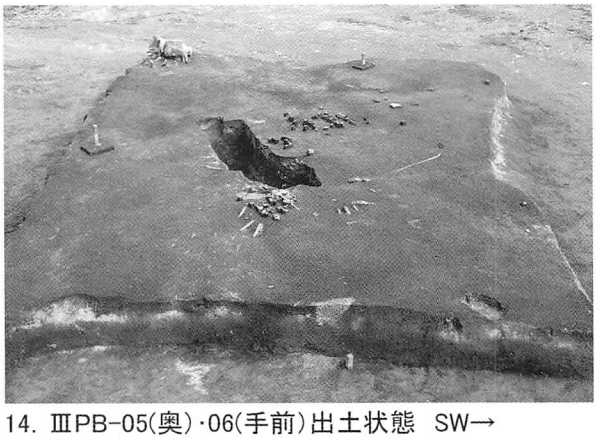
10．ⅢKP-482完掘　SW→



11．ⅢKP-482断面
SW→

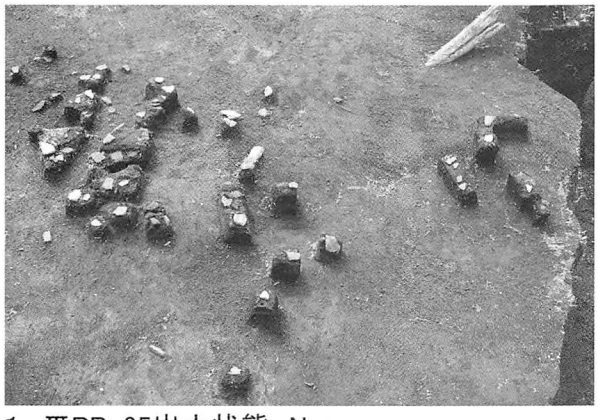
12．ⅢKP-483完掘　S→

13．ⅢKP-483断面　S→



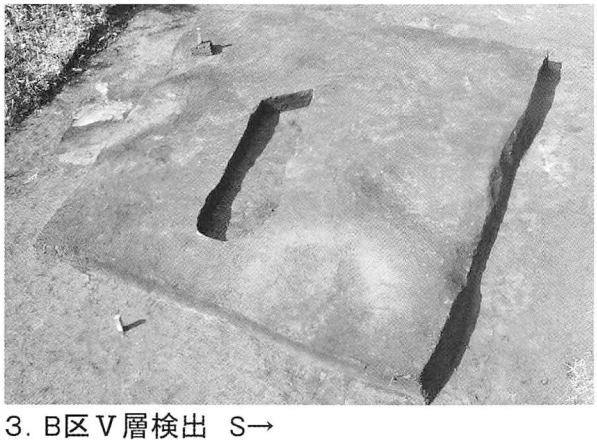
14．ⅢPB-05(奥)･06(手前)出土状態　SW→

図版5



1．ⅢPB-05出土状態　N→

2．ⅢPB-06出土状態　SW→



3．B区Ⅴ層検出　S→

4．TP-48検出　SE→

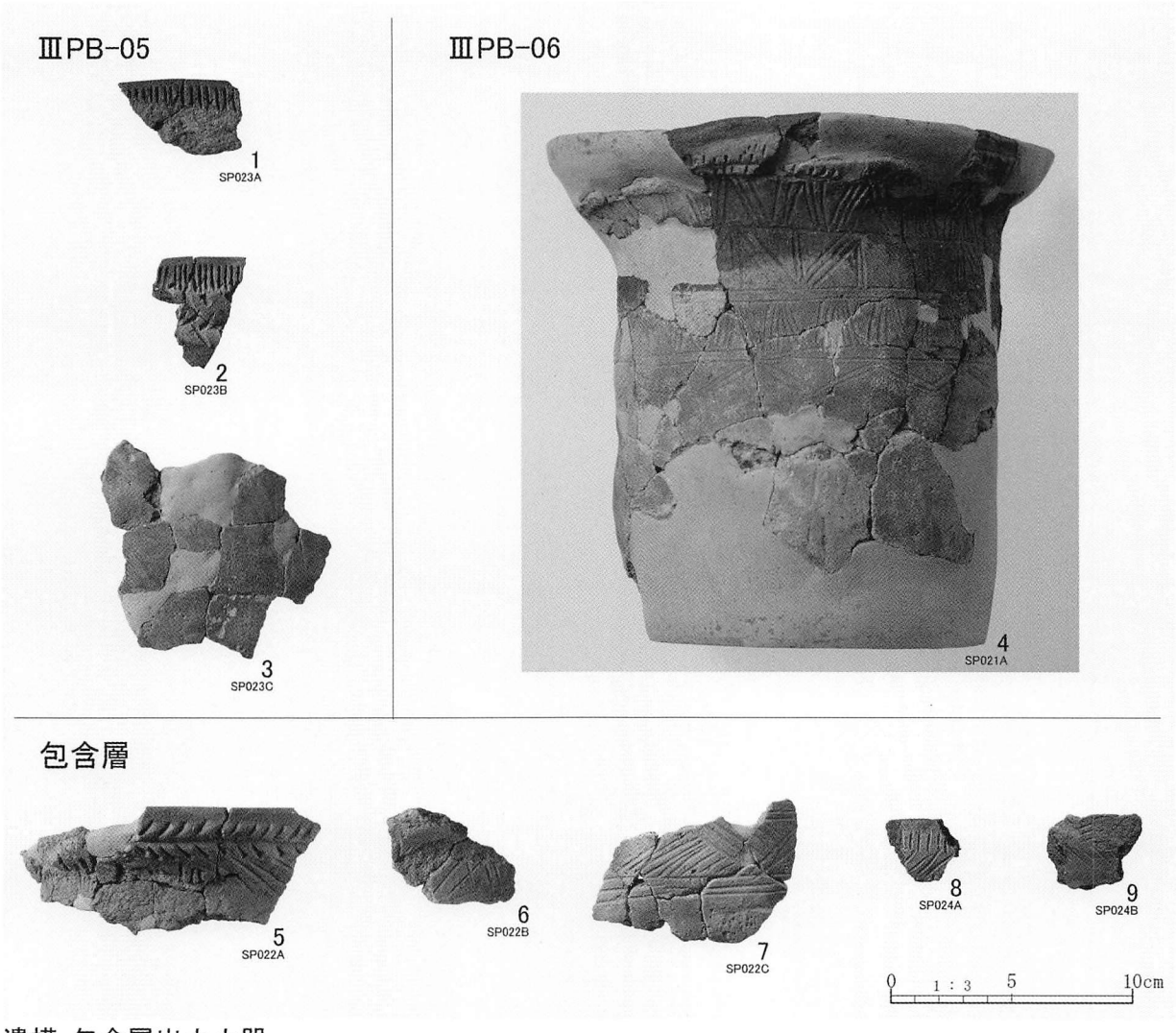
5．TP-48完掘　SE→

6．TP-48断面　SE→

7．C区Ⅲ層調査状況

8．ⅢBB-01調査状況

図版6



遺構･包含層出土土器

報告書抄録

ふりがな	あつまちょう かみほろない 1 いせき(2)
書名	厚真町 上幌内1遺跡(2)
副書名	厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	18
シリーズ名	厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	18
編著者名	宮塚義人・奈良智法・乾 哲也
編集機関	厚真町教育委員会
所在地	〒059-1601 北海道勇払郡厚真町京町165番地の1
発行機関	厚真町教育委員会
発行年月日	2018年 3月 9日
ふりがな	かみほろない1いせき
収録遺跡	上幌内1遺跡
所在地	勇払郡厚真町字幌内372-1～3
市町村コード	015814
遺跡番号	30
北緯	42° 46′ 24″
東経	142° 0′ 34″
調査期間	2016年7月19日～10月31日
調査面積	138㎡
調査原因	厚幌ダム建設
種別	集落跡
主な時代	中世アイヌ文化期、擦文文化期、縄文時代
主な遺構	中世アイヌ文化期:獣骨集中、杭列跡1条、杭跡5基、擦文文化期:土器集中2ヵ所 縄文時代:Tピット1基
主な遺物	Ⅲ層:擦文土器、礫 Ⅴ層:フレイク・チップ

要約

今回の発掘調査は電柱移設に伴う小規模な面積のため、遺構、遺物はあまり出土していない。Ⅲ層からは平成26年度調査の続きで、中世アイヌ文化期の獣骨集中が出土している。ⅢH-01の東側に出土し、関連する遺構と考えられる。その他、杭列跡についても過年度のように大規模な配列は認められないが、獣骨集中との位置関係からⅢH-01に伴う可能性が高い。

厚真町 上幌内１遺跡（２）

－厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書18－

発　行　日　　平成 30 年 3 月 9 日
編集・発行　　厚真町教育委員会
〒059-1601　北海道勇払郡厚真町京町 165 番地 1
電　話　　(0145)－ 27－ 2321(代)
印　刷　　ひまわり印刷株式会社